筑波大学第三学群国際総合学類

卒業論文

「共生」の価値観

―カウンターカルチャー的共同体の目指す生き方―

2007年1月

氏　　名：石井周治

学籍番号：200201068

指導教官：関根久雄

目次

第１章　序論 1
１．問題の所在 1
２．研究方法 2
第２章　カウンターカルチャー的共同体とは 4
１．カウンターカルチャーとは 4
(1)カウンターカルチャーの発生 4
(2)カウンターカルチャーとヒッピーコミューン 5
(3)日本のコミューン 9
(4)カウンターカルチャーの衰退 13
(5)カウンターカルチャーのその後と歩み寄るエコ・ビレッジ 17
２．カウンターカルチャー的共同体 20
第３章　カウンターカルチャー的共同体の文化 25
１．理想的共同体観に基づくカウンターカルチャー的共同体の分類 25
２．カウンターカルチャー的共同体生活 27
(1)政治型 27
(2)ユートピア指向型 30
(3)宗教型 34
(4)家族型 39
(5)エコロジー指向型 41
３．カウンターカルチャー的共同体の思想と共生文化 44
第４章　カウンターカルチャー的共同体文化と現代社会 49
１．カウンターカルチャー的共同体が生きる社会 49
２．カウンターカルチャー的共同体の隔絶性 50
(1)競争社会と共生社会 50
(2)物質主義と精神性 52
(3)外部者の視点とドロップアウト 55

3．カウンターカルチャー的共同体における「エコロジカル」な生き方と現代社会 58
(1)生きることと自然世界 58
(2)他者との共生意識 62
第５章　結論 65
注 69
参考文献 76
英文サマリー 81
謝辞 83

第1章　序論

1．問題の所在

昨今、生産・輸送・情報伝達の世界的な技術革新とともに、グローバリゼーションが急速に拡大し、ヒト、モノ、カネ、情報の移動は速度・頻度ともに勢いを増している。そうした世界情勢の中で、文化と文化のすれ違い、衝突、あるいは文化の消失の問題が次々と顕在化してきている。また、第2次世界大戦が終結して60年が経過し、様々な平和への取り組みがなされているにも関わらず、世界のいたるところに紛争やテロなどの争いの火種が散在しており、国籍、宗教、民族の違いに端を発する争いも発生し続けている。

このような問題を抱える今日の世界において、異文化間の対話の促進と多様性の共存が重要な課題である。現代社会がこうした課題を克服するには、どのような観点が必要なのだろうか。あるいは、そのような現代社会に生きる個々人に求められる生き方（姿勢）とはいかなるものであろうか。

筆者は、2004年3月から2005年2月までの11ヶ月間、26カ国を旅行し、それを通して、宗教、言語、慣習、価値観、その他あらゆるものを含めて、文化の多様性を見聞し、体感してきた。そして多様な文化の尊重と理解、相互に認め合い、尊重し合うという意味での「共生」を志向するようになった。その経験の中で強い関心を抱くようになった対象が、本論で取り上げる「カウンターカルチャー的共同体」である。

筆者と「カウンターカルチャー的共同体」との出会いはイランで出会った日本人バックパッカーの語りであった。彼は旅行の中で、「コミューン」と呼ばれる「カウンターカルチャー的共同体」での生活を経験していた。彼の話によると、その「コミューン」は、「カウンターカルチャー」の発生とともに登場したヒッピーによって創始された生活共同体であり、そこはさまざまな土地から来た人間が個々の能力を発揮しながら相互補完的に共同生活を行う場であった。一般にそこに集う人には金銭や所有に対する欲求が希薄であり、彼らは相互の信頼関係に基づいて共同体を成り立たせていたという。つまり、異なる文化的背景を持つ者が集い、互いに認め合い、価値観を共有しながら生活していたのである。

「カウンターカルチャー（対抗文化）」とは、「現代社会の主流をなす想定から根源

的に離脱した文化」［ローザック 1972:56］である。「主流をなす想定」に基づく文化を「メインカルチャー（支配的文化）」と言い換えるならば、「カウンターカルチャー」は「メインカルチャー」に対抗的な文化であり、社会的マイノリティではあるが顕著な特徴、意見を内包し、かつ発信しながら社会文化の一側面を形成するものである。すなわち、「カウンターカルチャー」は社会の表層にある潮流的文化の陰で、「ドロップアウト」した人々の拠り所ともなっている文化である。筆者は、この「カウンターカルチャー」が「メインカルチャー」と対を成し、文化のシーソーとなって社会思想にアクセントを加える役割を果たしているのではないかと考える。中でも、ベトナム戦争期における反戦主義や、近代的物質文化を批判的に解釈する精神論やヒッピー文化、あるいは自然との共存を推奨する自給自足共同体推進活動などの「原点回帰」的運動は、ラディカルな性質を持ちながら、なおかつ地縁血縁関係のない人々が「コミューン」や、「エコ・ビレッジ」といった具現的集合体としての共同体を形成し、その上、成員が相互に尊重し合う関係を成立させているという点で興味深い。

ゆえに本稿では、この「カウンターカルチャー」的思想から生まれてきた共同体を対象に、そこで共有されている価値観について論じた上で、「カウンターカルチャー」の社会的機能を考察し、「カウンターカルチャー的共同体」に内在する思想文化および実践活動が、異文化間対話の促進と多様性の共存の助長に果たしうる要素を内包していることを示すことで、「カウンターカルチャー的共同体」が目指す理想的な生き方の今日的意義と、その有用性を明らかにすることを目的とする。

2．研究方法

主に、カウンターカルチャーそのものやそれを存立の背景とする共同体での生活について記述した文献をもとに、思想や価値観に関する研究を行う。

まず第２章で「カウンターカルチャー」の形成過程と変遷を明らかにした上で、「カウンターカルチャー的共同体」の性質的特徴と社会的位置づけを確認し、定義づける。その定義を踏まえて、第３章では具体的事例を取り上げてカウンターカルチャー的共同体において共有されている価値観を明らかにする。第４章ではさらに、メインカルチャーとカウンターカルチャーの関係性と、共同体のカウンターカルチャー的思想が社会に投げかけてきた問題意識を解釈するとともに、カウンターカルチャー的共同体の社会的機能を考察する。第５章は結論とし、カウンターカルチャー的共同体の思想

文化および実践活動が「共生」に果たす役割を明らかにする。

第２章　カウンターカルチャー的共同体とは

１．カウンターカルチャーとは

(1)カウンターカルチャーの発生

カウンターカルチャー（対抗文化）とは、一般的には、「60 年代から 70 年代初めにかけて湧きおこった、『エスタブリッシュメント』に対する異議申し立てのこと」［渡辺 1982:93］である。この「エスタブリッシュメント」とは、伝統的に富と権力を備え、当時のアメリカ社会に強い影響力を持っていた政治的貴族やエリート層などの支配階級とその権威およびそれらによって確立された諸制度を指す概念である［ケニストン 1960:152; セイル 1975:15; シルク／シルク 1980:15-17］。すなわち、既存の社会を支えてきた支配層によって形成されてきた支配秩序に対する変革運動の基盤を成したのが、カウンターカルチャーである。

カウンターカルチャー発生の起源は 1950 年代のアメリカ社会にあった。第 2 次世界大戦中に消費が抑制され、個人貯蓄が増加していたことを背景に、戦後のアメリカでは消費支出が爆発的に伸張し、生活水準が大きく向上した。このことによりアメリカ社会全体で人々の中産階級化が進んだ。混雑した都市中心部を離れて、台所、寝室、浴室、リビングルーム、芝生の庭を備えた郊外の住宅に移住し、冷蔵庫、料理レンジ、洗濯機、テレビなどの電化製品や 2 台の自動車を持つという生活が標準化したことがその典型である。そうした経済的繁栄の中で、アメリカ社会全体で現状肯定感が強まった。その一方で、文学と芸術の世界においては中産階級的価値観に反対するビート（ビートニク）と呼ばれる人々の運動が顕著になった。ビート世代のバイブル的作品となった『吠える』を著したアレン･ギンズバーグや、アメリカ各地を放浪し、アメリカ文明の画一的生活に反逆したジャック・ケルアック、禅に強い関心を示し、たびたび日本に参禅したゲーリー･スナイダーなどの前衛的な詩人や作家が、ビートの代表である。彼らは西欧的な合理主義と物質主義に背を向け、東洋的な思想や価値観に憧れ、原始的な生活を送りながら創作活動を行った。また、当時のアメリカの若者の間では、中産階級的世界への反抗を描いた映画[1]やロックンロール音楽が流行し、商業主義と結合しながらではあったが、支配的な価値観を拒否する若者文化が形成された。これらの事実は、メインカルチャーとは異なるライフスタイルを探求する動きが、1950 年

代に存在したことを示す［今 1987:24-25; 野村 1989:32-39］。

そして、1960 年代前半期にベトナム戦争が深刻化した。これをきっかけに、1960 年代から 1970 年代にかけて、アメリカでは反戦運動が起こった。これは、1960 年代初頭に始まった黒人たちによる公民権運動と合流しながら、過激な学生運動やストライキへとつながっていった［古田 1991:152; 野村 1989:39］。

その中心的担い手となったのは、いわゆるメインカルチャーに基づく既成観念を持つ人たちにとっては風変わりに見える、アメリカなど先進諸国の若者たちであった。彼らの異議申し立ては、ベトナム戦争や人種差別への抗議、形骸化した民主主義の糾弾といった政治的なものから、セックスや女性の解放、ライフスタイルの変革といったものまで、多様であった。思想的にも、マルクスやフロイトが道教や仏教と同列に扱われ、アメリカ先住民の部族的生活が模範とされたり、最新鋭のエレクトロニクスを駆使したロックミュージックが象徴的なものとして捉えられることもあった［渡辺 1982:93-94］。

これらの異議申し立ての運動は、大きく 2 つに分けられる。1 つはニューレフト(2)である。これは当時の若い知識人や学生の政治的ラディカリズムを象徴するものである。そして、彼らの中の文化的ラディカリズムの潮流を象徴するもう 1 つの運動がカウンターカルチャーであった［宮原 1990:103］。

1950 年代の産業化、高度資本主義化が進むアメリカ社会において、合理主義と物質主義を根幹とするメインカルチャーが育まれた。またその恩恵として、アメリカ国内では世界的にも高水準な生活が享受された。しかし、社会的に現状に対する満足感が蔓延しつつある中で、社会や自分たちの生活を批判的に観察するビートが若者世代に現れた。そして 1960 年代、ビートの影響を受けた若者たちが、ベトナム反戦運動をきっかけにメインカルチャーに対する反発を露にし、改革思想と原点回帰思想に基づく運動を展開した。これらの運動はアメリカ国内にとどまらず、ヨーロッパや日本にも波及し、国際世論化した。そして若者世代の国境を越えた共感によって、世界的なカウンターカルチャーが発生したのである。

(2)カウンターカルチャーとヒッピーコミューン

1960 年代から 1970 年代にかけて、カウンターカルチャーの主役とも呼べる存在はヒッピーであった。一般的にヒッピーというと、長髪や奇抜な服装で「ラブ・アンド・

ピース」や「フリーセックス」などのスローガンを掲げた脱社会的な人々、あるいはその運動が連想される。

今によると、ヒッピーの登場は 1966 年までさかのぼる。1966 年にサンフランシスコのヘイト、アシュベリー両ストリートを中心に、全米からロングヘア、ジーンズの無数の若者が集まり始めた。彼らはネクタイやソックスを軽蔑し、長髪、髭、ビーズを好み、風変わりな服装に身を包んだ。また定職に就くことを拒否して、東洋的な瞑想を好み、麻薬やロック音楽を好んだ。そして街角や公園で寝転がって通行人に物乞いをしたり、何をするでもなく時間を過ごし、マリファナなどのドラッグを体験したりしていた。このような若者の存在はアメリカに留まらず、他の先進諸国にまたたく間に広がった［今 1987:21; 野村 1989:48］。

ヒッピー以外の人々にとって、彼らの行動は外見から見るかぎりはただ単に衝動的であったり刹那的であったりするだけのように見えた。また、社会的にはヒッピーの行為や主張はある面では対抗的であるとして見なされたが、またある面では、いつの時代にも存在する単なる若者特有の逸脱的な行動として、あるいは、誰もが一度はくぐり抜ける若者の「通過儀礼」の 1 つとして見られてしまうことも多かった［渡辺 1982:94］。

ヒッピーの主要な特徴は、自らの生き方を変えることにあった。ライクはこれを「新しい世代による革命」と表現している。彼らの抗議、反逆、服装、音楽、麻薬、思考様式、開放的なライフスタイルは、単なる異議表明や拒絶の一形態ではなく、自分自身、他人、社会、自然、国土などに対する人間の新しい関係の創造を目指すものだというのである［ライク 1973:10］。

彼らは、高度産業社会である欧米において、従来の労働に関わる倫理観を拒否した。あり余るほどの物を獲得しているにも関わらず、それ以上のものを求めて自分の一生を労働に費やす生き方に疑問を投げかけた。アメリカ社会において「当たり前」とされた生き方、競争的・攻撃的精神であくせく働き、物質的な富を追及する個人主義のライフスタイルを否定したのである。そして、「産業社会では物の獲得の背後で精神の喪失が進んでいる」というアンチテーゼを唱え、精神的な面における「革命」を目指した［今 1987:22］。

これらの「革命」は、中心的な組織体を持つものではなかったため、社会運動の実質を欠いてはいたが、若者や学生の間に浸透した反体制的、反文明的なムードの総体

として一定の凝集性を持っていた。そこには財産所有の権利に対して人間的な権利を、技術の要請に対して人間的要請を、個人的競争に対して共同体内の共存を、暴力に対して性的な悦びを、禁欲的勤労の倫理に対して自己充足の倫理を対置する価値観があったのである［宮原 1990:104］。

では彼らの目指した精神的な革命とは具体的にはどのようなものだったのか。この点について今は次のように説明する。

> 物の世界は有限、物の使用・所有には限界があるのに対して精神の世界は無限である。ここから『内面の旅』が始まる。彼らはドラッグの使用により、のちには瞑想、ヨーガなど神秘的な方法により旅をする。
>
> 精神の世界といっても、ここでは聖と俗、非日常と日常という二分法は退けられる。資本制の論理に従って勤勉に働き、余暇を読書、趣味に使う教養人や、日曜日には敬けんなクリスチャンに変身するウィークエンド・クリスチャンの類いは退けられる。ライフという生は優れて全体的なものなのだ。小ぎれいに生活を分けて生きる生き方は、まず否定されるのである。この意味で彼らは原理主義者なのである。
>
> 全体性の論理は精神と肉体の二分法にも向けられる。精神世界の旅はまず知覚の旅から出発する。マリファナ、LSD をはじめとするドラッグにはすぐれて知覚の変様（拡大）をもたらす効果がある［今 1987:23-24］。

彼らは知覚の拡大により既成の社会観念（メインカルチャー）から脱却し、多元的な視点に立って社会と自分自身の生き方を見つめ直そうとしたのである。

ベトナム戦争世代のアメリカの若者たちは、戦争に反対するとともに、既成の生活態度や風俗にも反逆した。それ以前は優秀であればあるほど、高い収入や社会的地位をもたらす職業に就き、世間での成功を目指すことが常識だった。しかし、この世代の若者は恵まれた家庭に育ち、エリート大学に入学した者ほど個人主義的な成功志向を拒否し、それとは別の活動に人生の意味を見出そうとする傾向が見られた。ゆえに、その傾向を最も極端な形で示し、自ら社会から脱落することによって既成社会への反逆を表現したヒッピーが同世代の若者を牽引する役割を果たし、カウンターカルチャーの主役となったのである。ブルージーンズやマリファナはこうした反逆的な態度を

象徴するものであった［宮原 1990:104; 野村 1989:48］。

豊かな産業社会への反逆によって発生した彼らには、それまでアメリカを支配してきた清教徒の宗教道徳的慣習は希薄であった。社会的繁栄を享受し、努力せずとも必要なものが手に入る彼らにとって、将来に備えて蓄えたりすることは無用である。したがって、現在の努力の先に存在するであろう空想上の未来はもはや問題ではなく、「いま、ここで」自分が望むように生きることこそが問題とされたのである。そして、洋の東西を問わずそれまで支配的だった、未来の輝かしい革命のために自分の身を捧げることをよしとする思想は退けられた。さらに、彼らの運動が、「いま、ここで」望ましい生き方を実践することで未来を改善することを志向するならば、その理想状態を運動自体に具現化していなければならなかった［今 1987:24］。

ヒッピーが先導したカウンターカルチャーは、自分たちが現在をよりよく生きることを最優先に志向した。そして、そのためには目的と手段が一致していなければならなかった。ゆえに、近代産業社会における物質主義を否定し、精神性を重視し、「生」についての探求によって、理想とする社会の創設に向けて突き進んだのである。

ヒッピーたちはアメリカの幾多の都市で戦争に反対してラヴ・イン、ビー・イン、シェア・インなどの集会を開いた。彼らは、愛、セックス、自由、開放、そして花を自分達の象徴に掲げ、取り締まりに出動した警官に「戦争ではなく、花を」と呼びかけ、花を差し出したことによってフラワー・チルドレンとも呼ばれた［古田 1991:153; 野村 1989:48］。

やがて、彼らは独自の思想を共有する者同士で共同生活を営み、新しい価値観、あるいは生き方を模索して「コミューン」(3)と呼ばれる生活共同体を形成していく。若者たちは「質素、優しさ、貧乏、共同生活、移動の自由、新鮮な空気、清浄食品、自然との睦み合い、を特色とする新しい精神」［ローザック 1969:xvi］を掲げ、世俗社会から一線を画した生活を行うようになっていったのである。その多くは、都市文明に背を向け、田舎で農業などを営む自給自足的な生活を選んだ。例えば、サンフランシスコのヘイト・アシュベリー地区のコミューンでは、共同生活を送りながらコミューンごとに生業を営み、その収益で生計を立てていたと言う(4)。カリフォルニア州北部のコミューンでは、田舎で自活しながら民芸品を作るとともに、有機農法で農作物やマリファナを栽培し、健康食品や麻薬の市場を相手にそれらを売ることで成長していった［ギトリン 1993:604］。

その生活は物質的には貧しく、清潔なものではなかったが、彼らは「拡大された家族」として相互の愛情によって結ばれた生活を打ち立てた。それは高度に発達した物質文明と企業社会によって失われた人と人との結びつきを回復しようとする誠実な試みであり、利己主義を否定したユートピア主義に立脚していた［野村 1989:48］。

こうしてカウンターカルチャー運動は、個人主義、物質主義を基調とするメインカルチャーから脱却した。そして、その運動の具現であり、象徴であるコミューンを組織して、自分達の目指す生き方を共有し、思想を洗練させていったのである。

(3)日本のコミューン

日本でもカウンターカルチャーの盛り上がりによってコミューン運動が盛んになったが、日本的ビートやヒッピーが出現してくる前から、本質的には同類のコミューンは形成されていた。武者小路実篤が提唱し 1918 年に創始した「新しき村」や、1910 年代に西田天香によって始められた一燈園などはその例である。これらは、「全世界の人間が天命を全うし各個人の内にすむ自我を完全に成長させることを理想とする」(5) 精神に基づく共同体であった。

当時の日本では、日清・日露両戦争を経て資本主義体制が浸透し、それに伴い絶対主義的な国家体制が確立された。そして、国家と国民とが分断される中で、閉塞的な時代状況が生まれていた。しかし、第 1 次世界大戦による好景気は、さまざまな大衆文化を生み出すと同時に、政治的にも護憲運動や民本主義運動を展開させた。その結果、絶対主義体制下の閉塞感は、一応は乗り越えられた。そこに一定のリベラルな雰囲気が生まれ、大衆の中に「個」の意識と「個性主義」が育った。しかし現実的には、それは近代帝国主義経済の急成長によって支えられるものであった。したがって、社会に「繁栄」が見られても、その裏では階級分化が急激に進み、ストライキが頻発した。武者小路が創った「新しき村」は、そのような時代に、共同生活を通して個々人の精神的な成長と、他者を尊重する意識を育むことを目的としていた。その精神は以下の通りである。

> 全世界の人間が天命を全うし各個人の内にすむ自我を完全に生長させることを理想とする。
>
> その為に、自己を生かす為に他人の自我を害してはいけない。

その為に自己を正しく生かすようにする。自分の快楽、幸福、自由の為に、他人の天命と正しき要求を害してはいけない。

全世界の人間が我等と同一の精神をもち、同一の生活方法をとることで、全世界の人間が同じく義務を果せ、自由を楽しみ、正しく生きられ、天命（個性をふくむ）を全うすることが出来る道を歩くように心がける。

かくの如き生活をしようとするもの、かくの如き生活の可能を信じ、それを全世界の人が実行することを祈るもの、又は切に望む者、それは新しき村の会員である。我等の兄弟姉妹である。

されば我等は国と国との争い、階級と階級との争いをせずに、正しき生活にすべての人が入ることによって、入ろうとすることによって、それ等の人が本当に協力することによって、われ等の欲する世界が来ることを信じ、又其為に骨を折るものである[6]。

新しき村では自己と他者の生命を尊重しながら、どのように生きることが本当の人間的生活なのかを見つめなおすことで、人類の平和共生の理想を普遍化することを使命として活動している。

他方、一燈園は、単なる宗教団体でもなく、単なる生活共同体でもなく、宗教活動と経済活動を1つに結びつけて生活することを、「世界平和」という目的実現への道としている。

創始者の西田天香は滋賀県の商人の家に生まれ、若くして小作農民を率いて北海道開拓に従事した。しかし、やがて小作農民と開拓の出資者との板ばさみになって悩み、苦悩しながら放浪生活を送った挙げ句、1903年、31歳のときに仏道に入る決意をした。彼は「争意の起こらぬ経済生活」の重要性を説き、一燈園ではその実現のためにまず「無償奉仕」、すなわち、「労働価値と貨幣価値の交換をしないこと」を根本理念とした。つまり、働いても報酬を求めないのである。一燈園の掲げる「無償奉仕」の原点は、「六万行願」と称される便所掃除である。それは、第1次世界大戦後の1919年に国際連盟ができた際、西田天香が「もう戦争の起こらぬようにと、平和を祈る行為として」始めたものだという[7]。世界平和と便所掃除の結びつきについて、一燈園のスポークスマン的存在であった原川は、次のように説明する。

天香さんは、真の世界平和を実現するには、まず生活そのものを一燈園で実践しているように争いのないものにしなければならないと考えられた。そこで、一燈園の懺悔奉仕の生活と人々を結縁する祈りとして、便所掃除を始められたのです。見知らぬ家を訪れ、拝みながら、お便所の掃除をさせてください、と頼めば、こちらの真剣な心持ちが通じ、仲良くなれるきっかけも生まれます。なにしろ便所掃除は、労働の対価を求めず、最底辺の生活に許されて生きる、という一燈園生活の象徴ですから[8]。

一燈園での生活は、平和を実現するために、ただ宗教にすがるだけでなく、争いのない経済生活を実践することを重視したのである。

このように、戦前の日本では、個人の日常的な行動の変革を出発点として、社会変革を目指すユートピア的コミューン、あるいは宗教団体的コミューンが組織された。そこで生活する人々は当時のメインカルチャーであった利己主義と競争社会の繁栄などに問題意識を抱き、それらの概念から脱却し、人として目指すべき生き方を追求するために共同生活を行った。このメインカルチャーからの脱却行動、そして自己と他者との平和的共生を理想とする思想や文化は、カウンターカルチャーの先駆けと言えるものであった。つまり日本では、カウンターカルチャー発生以前からカウンターカルチャーと本質を同じくする文化が存在していたのである。

そうした状況の中で、第2次世界大戦後、アメリカで巻き起こったカウンターカルチャーやヒッピー文化の盛り上がりは、日本の若者にも多大な影響を与え、日本的カウンターカルチャーを生み出した。

高度経済成長期に現れた反社会的な若者たちは、「日本ビート」と呼ばれた。彼らは、1950年代のアメリカに起こった、抑圧的な社会や保守的な価値観に反発し、人間性の解放を求める運動に参加したビート・ジェネレーションの影響を受けた人々である。1960年代半ば頃に、新宿に寄り集まったボヘミヤン[9]、反社会的な詩人、社会で認められず落ちぶれた画家、60年安保の闘士、その他都会に憧れて上京してきたもののやるべきことを見出せない若者たちがそれであった。彼らは、既存の価値観、倫理観の一切を生活のレベルにおいて否定しようと試みた。資本主義体制下の労働を拒否し、ブルジョワ的人間関係を断ち切り、家庭も、職場も、学園も捨てて、新宿の路上や、すでに国際的なビートのたまり場として知られていた風月堂[10]などにたむろし、社会

的な善悪の判断基準を乗り越えた先にある、人としてどのように生きるべきなのかという課題を探求したのである［山田:1980；今 1987:25-26］。

当時の日本は、アメリカと同様に経済的な豊かさを増していた。東京オリンピックの開催を契機として、新幹線をはじめとするインフラ整備が進んだ他、首都圏や中京周辺地域で大規模な産業地帯が形成された。大都市には農村から人口が流入し、集合住宅（いわゆる「団地」）での生活が一般化した。家庭生活においてはテレビ、冷蔵庫、洗濯機が「三種の神器」と呼ばれ、どの家庭も競って手に入れようとした。こうした生活の変化を通して市民階級を中心とした広範な中間層が形成された［ウィリアム／ロジャー 1991:128-136］。

この拡大した中間層が中心勢力となって、農民、中小企業主、主婦、芸能人、宗教団体などを広く取り込み、安保闘争を活性化させていった。そうした状況下で、学生は運動の先頭に立ち、機動隊や右翼としばしば衝突した。やがて、学生による学園闘争が急激に盛り上がり、「全学連」の名を世界的に知らしめるまでになった。この時期の社会運動において若者は極めて前衛的であった。しかも、同時期に「ヤング・パワー」、「ヤング・ラジカル」という言葉が流行したように、同種の現象が世界的な規模で進行していた。こうした情勢の中で、アメリカで発生したヒッピー運動が日本にも波及した。既成の社会体制や、発展する文明に背を向けたヒッピーたちの姿勢、すなわちテクノロジーに反発して人間らしさを求め、管理ではなく自由を求めた彼らの、個人尊重の人間主義や、したいことをするという主観主義が日本の若者の共感を得て広がったのである［坂田 1979:267-270］。

1967 年になると、日本ビートを中心とした若者が日本的ヒッピーグループとして結合し、コミューン形成を志向する「部族」が誕生した。「部族」は 1967 年 12 月に『部族新聞』を発刊し、その中で「部族宣言」を発表した。それは、一人一人の自覚、「解脱」、あるいは現実を基礎として、「この国家社会という殻の中に、いま一つの、国家とは全く異なった相を支えとした社会の形成」［今 1987:26-27］を告げている。この社会は、あらゆるものの私有を放棄し、指導と被指導の関係や、統治という概念を撤廃した社会である。これは、彼らがメインカルチャーから離脱し、世俗社会からは隔絶した社会形成、すなわちコミューン形成を目指すことを意味し、日本におけるヒッピーコミューンの方向を示すものでもあった。さらに、「部族宣言」には強い宗教色が現れていた。とりわけ、アメリカのビートの影響を受けて入ってきたさまざまなヒンド

ゥーイズム、仏教の教えが彼らに深い影響を与えた。そのため、彼らの集まりでは、厳しい労働と瞑想を通じて、自然の中で自己、自然、宇宙と対話することが探求されたのである［今 1987:27］。

こうして日本では、カウンターカルチャーの盛り上がりによって発生してきたヒッピーコミューンと、元来からカウンターカルチャー的思想を共有する人々によって組織されていた新しき村や一燈園など古典的コミューンが並存し、双方が日本的カウンターカルチャー運動の具現的共同体として、社会からの離脱者を受け入れて存続してきたのである。

(4)カウンターカルチャーの衰退

ではその後、カウンターカルチャーとコミューンという共同体はどのような変遷を遂げてきたのだろうか。

1970 年代前半のカウンターカルチャー最盛期には、アメリカだけでも 3,000 を超える数のコミューンがあったという[11]。さらに、東洋宗教の神秘主義、禅やヨガへの憧れを伴ったカウンターカルチャーによってアメリカでは各地に禅センターが開設された。また、ハリ･クリシュナというインド舞踊が好んで踊られた。フォーク音楽やロック音楽は、メインカルチャーに基づく社会体制への反逆を表現し、麻薬、人種、性、人生について説き、カウンターカルチャーを象徴する重要な媒体となった。それらを通して、カウンターカルチャーは若者の広範な関心を引き付けたが、その一方でマスメディアによって広く社会に伝えられることでカウンターカルチャーの商業化にも繋がった。音楽、服装、麻薬、出版物などカウンターカルチャーが生み出したさまざまな様相はメインカルチャーの資本主義に組み込まれ、市場における商品として扱われるようになった。そして、メインカルチャーの一部を成す流行風俗の 1 つとなることで、反体制的主張を失っていった［今 1987:31; 野村 1989:49,52-53］。

コミューンに関しても、ヒッピーたちのライフスタイルやファッション性に憧れて、あるいは麻薬やセックスなど快楽の側面を重視してコミューンに参加していった若者たち（いわゆるイージーライダー）によって思想の純粋性は失われ、組織を維持できずに消滅していくものが多数あった。彼らは、産業社会への強い問題意識を持っていたわけでも、より崇高な生を求めるための精神革命を目指していたわけでもなかった。その意味で思想の純粋性に欠けていたと言える。このようなイージーライダーの増加

により、自律的修行と世俗的ライフスタイルからの脱却というコミューンに備わっていた精神が弱体化し、コミューンは衰退した。

また、資本主義を結局のところ打破できないという現実的な焦りと絶望からくる自己破壊的作用も、カウンターカルチャー衰退の原因であったとされる(12)。アメリカでは1968年7月にヘイト・アシュベリーで暴動が発生し、引き続いて全米各地でヒッピーの凶暴化による事件が相次いだ。さらにもう1つの理由として、ヒッピーを支えていたのが他ならぬ高度に発達した資本主義社会そのものであったことも挙げられる。アメリカのヒッピーの大多数は中産階級の出身ではあったが、1970年代までに100万人が家出人となり、コミューンにいた300万人も政府の福祉政策に助けられていた。しかし、1973年の石油危機や1975年のベトナム戦争終結から起こった政府の財政赤字によって、カウンターカルチャーはほぼ息の根を止められてしまった(13)。時を同じくして日本では、ニクソン・ショック、石油危機の影響によって経済が低迷した。それに伴い、若者の運動は次第に停滞し、ラディカルな性質を失っていった。

カウンターカルチャーを表明し、実践しようとした者の大部分は若者であり、彼らは経済的にも社会的にも自分自身の生活基盤を持っていなかった。だからこそライフスタイルの変革を謳い、衣食住をまかなう自給自足のコミューンを作ったが、現実的には自己の外面や内面の変革と、それを志向する者同士で人間関係を築くに留まり、経済的、社会的基盤を作り出すまでには至らなかった。ゆえにカウンターカルチャー思想を持つ者は、結局はメインカルチャーの中で自分達の経済的、社会的立場を確保する必要があったのである。カウンターカルチャーはメインカルチャーとは根本的に異なる価値体系を持つラディカルな運動であったにも関わらず、この生活基盤の部分でも限界にぶつかり、サブカルチャー（従属文化）の領域から抜け出すことができなかったのである［渡辺 1982:158; ギトリン 1993:507］。

一時は先進諸国において国際的な社会現象を巻き起こしたカウンターカルチャーであったが、流行やファッションといった市場経済の価値観に取り込まれ、また経済的不況という資本主義的要因に直接的な影響を受け、衰退した。メインカルチャーを打ち崩す勢力になることを目指したカウンターカルチャー運動は、最終的にはメインカルチャーから完全に脱却することができぬまま、逆にメインカルチャーに飲み込まれる形でその勢力は縮小していったのである。

しかしそれでも、カウンターカルチャー的組織を存続させているコミューンがある。

アメリカのラマ・ファウンデーション(Lama Foundation)や、スコットランドのフィンドホーン(Findhorn)、日本の一燈園などである。

ラマ・ファウンデーションはニューメキシコ州の山中にあり、どの宗教にも属さない普遍的スピリチュアリティ（精神性）を信仰の中心に据えるコミューンである［ラム・ダス 1989:456］。もともとヒッピーコミューンの 1 つであり、カウンターカルチャーが衰退した現在も元来のヒッピー同様に精神性を重視した生活を続けている。1971 年に、創始者の一人であるラム・ダスを中心に、ラマ・ファウンデーションの思想とその実践生活を紹介する『ビーヒア・ナウ』［ラム・ダス 1971］を出版した。この本がアメリカ国内だけでも 200 万部を売り上げるベストセラーとなり、ヒッピーのバイブルと呼ばれた(14)。現在では出版物による情報発信の他、外部に向かってワークショップなどを行い、「普遍的スピリチュアリティ」なるものを紹介しながら存続している。

フィンドホーンは、現在ユネスコや国連とも協力関係を築き、世界的に注目されているコミューンである。その始まりは、1962 年にピーター・キャディと妻アイリーン、彼らの幼い子供 3 人、そして友人のドロシー・マクリーンがフィンドホーン村の外れのキャラバンパークの荒地に移り住んだことであった(15)。彼らは物質主義的な社会から離れ、日常のあらゆることに意識を傾けて生活した。彼らが生活のためにその荒地に野菜を作り始めると、乾燥した砂地の土壌と気候からは、通常育つはずのない種類の植物が育ち始め、土壌学者が調査に来るほどになった。ドロシーによると、それは植物の精霊「ディーバ」達からのメッセージを実践した結果であった。これらの出来事は、「自然界の精霊と人間の相互協力による新たな可能性」としてマスコミで取り上げられるようになり、この場所に魅かれた人々が加わってコミューンが形成された。そして、日常的な気付きや自然の中に存在する精神性・聖なるものについての理解と共感を深め、それらを重視した生活を追求する場所としてのコミューンを築いてきたのである。その後、フィンドホーンは多数の本を出版するとともに、ドロシーがアメリカを中心に世界各地でワークショップを行い、知名度を高めてきた。現在では教育を中心とした非営利の慈善財団として、見学ツアーやグループ訪問の受け入れの他、フィンドホーンの共同生活体験週間を設けて、毎年、世界 70 カ国以上の国から 1 万 4,000 人を迎え入れている(16)。

一燈園は「六万行願」や「路頭托鉢」活動の他、「光卍十字運動」と称して日本国

際連合協会やユネスコ運動、国際宗教同志会や世界宗教者平和会議（WCRP）に協力するとともに、国際自由宗教連盟（IARF）に参加し、一宗一派を越えた立場に立って世界平和の祈りに参加している。また一燈園での共同生活の短期研修期間として「智徳研修会」を開設し、個人の修行、会社の研修、新入社員の練成などに幅広く活用されている。加えて団体内部において、学校法人である「燈影学園」、日本全国で演劇活動を行っている「株式会社すわらじ劇園」、一燈園生活を基盤にして農業に関する技術指導をはじめ、種苗の幹施・生産・販売を行う「株式会社のうけん」、各方面の企業や社寺から注文を受けて雑誌・書籍などを出版している「株式会社燈影社」、建築設計施工事業を行う「株式会社燈影設計工務」を運営している。これらの事業によって、団体外部の人々を積極的に受け入れると同時に、無所有奉仕の理念に基づいた社会奉仕活動を行って社会に働きかけることで、平和への道を目指し続けているのである(17)。

現在まで存続し続けているカウンターカルチャー的思想に基づくこれらのコミューンの特徴は、出版物やホームページ、その他の方法を利用してコミューン外部に存在するメインカルチャーに属する人々に対して情報発信を行う能動性と、彼らの思想や価値観を共有する枠組み（人工的規模）をより大きなものにしようとする拡大意識である。こうした特徴の対極を示すのが、カウンターカルチャー思想から出発しながらカルト集団化したコミューンだろう。その代表例はチャールズ・マンソンがリーダーとなって組織したザ・ファミリーである。ザ・ファミリーはマンソンの強権独裁的な共同体運営によってカルト集団化し、1969 年にシャロン・テート殺人事件をはじめとする連続殺人事件を起こした［野村 1989:53］。強権独裁的なカリスマ指導者個人の思想に基づく他律的支配に成員が身を委ね、個々人の自律意識や集団外部の価値観に対する関心が弱まる環境は、閉鎖的かつ排他的な、いわば自主的アパルトヘイトの状態である。カウンターカルチャー衰退期に多くのコミューンが消失していったのは、カウンターカルチャー思想から生まれたコミューンの多くがこうした自主的アパルトヘイト的性質を持ち、現実に対する絶望感、焦燥感から自壊自滅していくしか方法がなかったからである。この特徴は「社会との接点」、言い換えるとコミューンの開放性に関わるものである。開放性があり、外部社会に対して開かれたスタンス、あるいは積極的に働きかける姿勢を持ち、それを維持、拡張することでメインカルチャーの中で長期存続してきた前者は共存型コミューン、メインカルチャーを排除し、分断している後者は閉鎖的破滅型コミューンと分類することができる。

(5)カウンターカルチャーのその後と歩み寄るエコ・ビレッジ

さて、衰退期を経た現在のカウンターカルチャーはどのような状況を見せているのだろうか。

1970年代以降、カウンターカルチャーはメインカルチャーの商業主義に取り込まれてファッション化、風俗化が進み、対抗性を持つ文化としての存在は極めて希薄なものになった。しかし、それでもメインカルチャーを批判的に捉える思想は消失することなく、カウンターカルチャーはサブカルチャーの一部として再編成され、文化的な性質変化を遂げてきた［岩永 1993:68-69; 松原 1972:114］。

ここでいう文化的な性質変化とは、ヘアースタイル、服装、習慣、関心、政治姿勢、他人との関わり方など生活様式全体の変革を求めるものではなく、精神世界の探求に重きを置く傾向への変化である［ライク 1973:235; 大類 2002:154］。そのような変化の中で、その思想は本質的にはカウンターカルチャー本来の思想から離れ、メインカルチャーに包含される「カウンターカルチャー的」思想となった。この「カウンターカルチャー的」思想の新たな潮流として登場してきたのが、ニューエイジ運動である。この運動は 1980 年代の高度消費社会に象徴される物質主義的価値観を不適当なものとして捉え、社会的関心への回帰、露骨な物質主義の拒否、エコロジーへの興味の復活、オルタナティブなライフスタイルなどの重要性を主張するものである。ニューエイジ運動に含まれるものはチャネリング[18]、クリスタル･ヒーリング[19]、ホリスティック医学[20]、トランスパーソナル[21]、エコロジー運動[22]、ニューサイエンス[23]であり、これらの各側面の根底にあるのは「霊的なものの見方」を重視する思想である。ニューエイジ運動では身体、心、霊という3つの次元で物事を考える。身体と心は自分のものであり、霊とは「有限な個人」を超越した存在である。そして有限な生命を生きる身体と心が日常生活において普遍的な霊と共存関係にあるかどうかが問われるのである。そうした考え方に基づいて自然や他者との調和を模索し、新しい文化を創造することで社会全体を変化させていこうとするのがニューエイジ運動の思想である［大類 2002:152;海野 1998:16-18］。ここには、カウンターカルチャーにおいて見られた精神性を重視した生き方を追及し、個人の生き方の変革によって社会の変革を目指す性質が継承されている。

1990年代に入り、バブル経済が崩壊したことをきっかけとして、社会的価値観の変化が起こった。そして欧米ではニューエイジ運動的思想の広がりが社会現象となった。

その顕著な例が、地球全体の環境問題が問われたことに端を発するエコロジー運動や緑化運動への注目、およびオルタナティブなライフスタイルへの注目の高まりであった。さらに近年では、ダイエット感覚で気軽に精神的セラピーを受けることが特別なことではなくなっている。その他、自然食品や健康食品に対する需要の高まり、地球環境に配慮した商品への関心の高まりなど、心や身体、そして自然にとってよいとされる生活の促進が一般化している。この現象は、限られたグループによる意識的運動であったニューエイジ運動のカウンターカルチャー的価値観が、通俗的で日常的なレベルにまで浸透し、無意識的なライフスタイルにまで拡散していることを示している［海野 1998:13-14,76-77,132-133］。

こうしてカウンターカルチャー的な思想や価値観が社会的な流行風俗としてメインカルチャーの一部として取り扱われるようになった。また、その思想や価値観に基づく生き方はオルタナティブなライフスタイルとして社会的にも重要性が見直されてきていることから、現在、カウンターカルチャーの生活基盤はメインカルチャーに所属しながらも、生活実践の面ではメインカルチャーに対抗しうるサブカルチャーとして社会的に重要な位置づけにあると言える。

こうした状況の中で、地球規模での環境意識の高まりや資本主義経済の安定が、生活のゆとりを生み出したことによるライフスタイルの多様化によってエコロジー運動、中でもエコ･ビレッジ運動に対する注目が高まり、その活動が活発化してきている。このエコ･ビレッジ運動に着目してみると、そこには現代に生きるカウンターカルチャー的な思想とそれに基づいて形成された共同体の現状を垣間見ることができる。

エコ･ビレッジ運動は 1980 年代後半からヨーロッパを中心に展開されるようになった運動である。グローバル・エコビレッジ・ネットワーク代表のロス・ジャクソンは、エコ・ビレッジ運動を「新しいライフスタイルの運動」[(24)]であるという。エコ・ビレッジとはマネーベースの価値観から脱却し、ライフベース（人間関係、生き方、生活、人間性）の価値観に基づいて形成される共同体である。ここで用いられるマネーベースの価値観とは、金銭によって様々な物事の価値を規定する資本主義的な発想に基づく価値観である。一方でライフベースの価値観とは、環境や文化、社会的ネットワークなど、人が生きていく上で重要となる、あるいは必要不可欠な要素に重きを置く価値観である。このライフベースの価値観においては、自然との付き合い方や家族、その他の人間関係の他、他者と社会的に共存する中で個々人がいかに自己実現しながら

よりよい生き方を実践できるかといった非物質主義的な側面が重視され、価値基準評価の対象となる。エコ・ビレッジは、「果てしない幸福な未来へと続いていくライフスタイル」を求めて努力することで持続可能な生活モデルの具体例となり、人々との関わり合いやエコロジー、精神世界といったものが軽んじられる現代社会において、それに対抗するために誰もが実践できる効果的な方法を提示しているのである[25]。

このように、現代社会において主流となっている価値観への対抗性を示し、なおかつ他者との関わり合いや、生き方自体を見直そうとする姿勢は、他でもないカウンターカルチャー的思想が示してきた姿勢と一致するものである。加えて、こうした思想を共有する人々が集い、共同体を組織して共同生活を営んでいる点も、1960年代から1970年代を中心に大量に生み出されたカウンターカルチャー思想に基づくコミューンと一致する。また、エコ・ビレッジはメインカルチャーに属する人々や、社会に対して新しい価値観を提案することを目的にしており、その点で長期的に存続してきたカウンターカルチャー的思想に基づくコミューンと共通の特徴を持っている。

しかし、自分達の思想の純粋性を確保するためにメインカルチャーから離脱し、その上で共同体外部への働きかけを強めてきたカウンターカルチャー最盛期のコミューンとは異なり、エコ・ビレッジは元来から共同体外部の社会で生きる人々に積極的に働きかけることを目的とし、その力を増幅するために共同体を組織して活動している。例えば、先進国では100人程度の地域社会を人工的に造り出し、現代人に新しいライフスタイルを提供している。その一方で、それ以外の地域では、村のネットワークを組織し、村落社会を維持することで都市社会への人口流出を食い止め、バランスの良い発展の仕方を提示したり、ホームレスなど土地を持たない人々に新しい生活環境を提供するなどの活動を行っている[26]。そして、そうした活動を通して基本的生活の重要性を考慮した社会への転換を図り、マネーベースからライフベースの社会的価値観を創り上げていくことを目標としている。そのために、エコ・ビレッジ運動は価値体系として、多様性を受け入れたり、互いの違いを認めたりする価値観を取り入れて活動しているのである[27]。このような観点から、エコ・ビレッジは高い開放性を持った組織であると言える。また、カウンターカルチャーのサブカルチャー化の流れとともに、その産物であるエコ・ビレッジは元来のカウンターカルチャー思想が内包していた社会批判性を緩和している。そして生態系、社会・経済性、精神性に広く関わるエコロジー意識の重要性を主張すると同時に、そうした意識に焦点を当てた生活を実践す

ることを通して、外部社会にオルタナティブなライフスタイルを提案する共同体となって、メインカルチャーへの対抗性を保持しながら社会に適応しているのである[28]。

カウンターカルチャー的思想およびカウンターカルチャー的思想に基づくコミューンが、メインカルチャーに属する世俗社会から離脱した人々の内向的姿勢から生み出されてきたのに対し、エコ・ビレッジは活発なアウトプットの主体となることを目指して生まれてきた外向的な共同体である。しかし、カウンターカルチャー的思想に基づくコミューンを長期的に見てみると、今日まで残存してきたコミューンは総じて対外的外交性を持つ共存型のものであり、この点でエコ・ビレッジはカウンターカルチャー的思想に基づくコミューンの新たな形式であると言える。これらのカウンターカルチャー的思想に基づくコミューンは、元来のカウンターカルチャー思想との共通点を維持しながらも、メインカルチャーに対する対抗性を緩和し、メインカルチャーと融和、共存を可能にしてきた。ここにカウンターカルチャー思想からカウンターカルチャー的思想への思想的変化の意義がある。いずれにしても、カウンターカルチャー的思想は社会通念となっている価値観に疑問を抱き、他者や周囲の環境と共存するための望ましい関係を模索しながら、個々人の生き方を見つめ直そうとする思想として、共通の基盤を持つものであり、そうした思想を共有する人々の活動の具現集合体がここまでに挙げてきたカウンターカルチャー的思想に基づくコミューンなのである。

2．カウンターカルチャー的共同体

ここでは、これまで見てきたカウンターカルチャーの発生・衰退、それに伴うカウンターカルチャー的思想に基づくコミューンの形成、エコ・ビレッジと呼ばれるコミューンの台頭の背景とその流れ、そしてこれらの共同体形成のもとになった思想から、「カウンターカルチャー的共同体」の性質について述べておこう。

1960年以降、カウンターカルチャーに基づく変革思想を共有する者が多数のコミューンを形成した。その過程で自閉的破滅型コミューンのような例も発生した。これは、メインカルチャーと一種のパートナーシップ関係にある本来のカウンターカルチャー的思想からは逸脱しており、メインカルチャー社会への対抗性と適応性とを両立できているとは言いがたい。ゆえに本稿では、共存思想型共同体を取り上げ、その生産性に注目する。また本稿では、エコ・ビレッジを含むカウンターカルチャー的思想に基づくコミューンを、「カウンターカルチャー的共同体」と呼ぶ。これはメインカルチャ

ーから「ドロップアウト」した者たちによって形成された新たな共同社会である。

「ドロップアウト」はカウンターカルチャーとカウンターカルチャー的共同体について論じる上で重要となる概念である。それは、ビートやヒッピーなど社会から離脱した人々の離脱行動を象徴する概念として用いられる用語で、社会の中の支配的な制度や政治体制、文化的なものや価値観などから抜け出すと同時に、それらに対する反抗を意味する［渡辺 1982:79］。ドロップアウトという行為を単純な「社会からの現実逃避」行動と区別するために、この「反抗」という性質に着目する必要がある。ケニストンは、ドロップアウトの動機は社会に対する明白な異議申し立てではなく、しばしば自己の存在規定や両親との一体化という個人的な問題や、過酷な学業の圧力から逃れることに関係している［ケニストン 1977:161］と述べる。彼はドロップアウトにおける反抗性を重視することなく、現実逃避型の社会離脱行動と同一視している。これに対しローザックは、ドロップアウトを「自発的な原始回帰主義に基づく雄々しい努力」［ローザック 1969:xv-xvi］だと評価し、都市工業主義による発展を遂げたアメリカの人工的環境に対して脱工業化を迫り、産業化、合理化および大量消費社会化が進行する事態の改善のために不可欠の貢献をする有意義な行動としての可能性を示唆している。また渡辺は、個々人の大学や仕事、家、土地などからのドロップアウトが、新たな人々との関わり、自己のアイデンティティの探求の機会、そして社会への働きかけを生み出し、カウンターカルチャーにおいて不可欠な自己、他者、社会、そして未来を懐疑的に再認識するという行為に対して重要な役割を果たすと捉えている［渡辺 1982:104］。こうした 2 つの捉え方が存在するドロップアウトに関して濱島は、自由と自己実現を求める脱落者型と、既成社会へのラディカルな変革志向を持つ攻撃型に分類している［濱島 1973:39］。前者はいわゆるイージーライダー的なドロップアウトの方法である。だが、既成のメインカルチャーに代わる新たな価値体系に基づく社会を求めたカウンターカルチャーにとって必要な資質は後者のドロップアウトであり、単なる社会からの逸脱行動に留まらず、反抗性を持つ行動によって個々人が新たな価値観を持ち、既成の社会に働きかける姿勢を養うことが不可欠だったのである。そして、ドロップアウトによって物質的な富を追求する社会を批判的に観察し、精神性や周囲の環境との関係など非物質的な豊かさを追い求める者たちが出会い集うことで形成される社会が、カウンターカルチャー的共同体なのである。

このカウンターカルチャー的共同体の特徴は、まずその共同体が特殊な性質を持つ

点である。「共同体」を意味する用語として、一般的には「コミュニティ」が使われる。しかし、結合の性質に力点が置かれ、コミュニティを共同の社会的特質を示すものと見て、成員間に慣習や伝統などの共通性があり、強い共属意識が形成されている場合は共同体と呼ばれるが、コミュニティが一定の地域性と地域における生活から派生する共同性双方を基礎として成立していると考えられる場合は、地域社会と呼ばれることが多い。社会学ではマッキーヴァーが「アソシエーション」の対概念としてこれを用いた。彼は、特定の利害関心を追及するための人為的な結合体である「アソシエーション」に対して、一定地域で営まれる自生的な共同生活としてそれを捉えている［マッキーヴァー 1975:45-51］。

しかし、カウンターカルチャー的共同体に関して、地域性を求めることは困難である。なぜならばカウンターカルチャー的共同体では地縁のない人々が集い、共同生活を送っているからである。筆者がイランで出会った日本人バックパッカーはブルガリアにおけるコミューン生活の経験から、さまざまな土地から来た人間が個々の能力を発揮しながら相互補完的に共同生活を行う場としてコミューンを位置づけていた。つまり、異なる文化的背景を持つ者が集い、それぞれの人間がそれまでの生活において培ってきた互いの価値観を尊重する一方で、カウンターカルチャー的思想に基づく価値観を共有しながら生活しているのである。共同体によってはキャラバンを組んで移動しながら生活するものもあれば、アパートのような狭い空間で共同生活するものもあり、その形態や規模は多様である。したがってカウンターカルチャー的共同体は、地域性や共同性に基づく感情を基礎として成立している地域社会とは根本的に異なるのである。また、慣習や伝統は一定の時間をかけて醸成されるものである。カウンターカルチャー的共同体には、異なる社会で生活していた者たちが集っているため、彼らの中に慣習や伝統などの共通性を見出すことは容易ではない。しかし、共同生活が長期化するにつれて、成員の間に慣習や伝統が醸成され、1 つの「カウンターカルチャー的共同体の文化」として定着することはありうる。この「カウンターカルチャー的共同体の文化」にカウンターカルチャー的共同体のもう 1 つの特徴が見出せる。

カウンターカルチャー的共同体は出入り自由の共同体であり、成員の一部は流動的に参入・退去していく。決して「カウンターカルチャー的共同体文化」は成員に対して強制されるものではなく、共感する者だけが共同体に残留するするシステムの上に成り立っている。出入りが自由であるという性質はカウンターカルチャー的共同体に

限らず、あらゆる社会に共通であるが、カウンターカルチャー的共同体の場合、その出入りが単なる空間的な意味における出入りではなく、「カウンターカルチャー的共同体文化」そのものからの出入りであることである。カウンターカルチャー思想は時代を経てメインカルチャーに内在化され、サブカルチャーの一部に属するいわゆる「カウンターカルチャー的」思想へと変化してきたが、精神性を重視し、他者および周囲の環境との共存を模索して個々の人間存在としてよりよい生き方を追求するという「カウンターカルチャー」としての非物質主義的な思想の根底基盤は常に共有されてきた。有形で表面的な性質ではなく、生活のあらゆる側面を意識しながら生きる哲学的精神や、自然や人間関係を尊重する価値体系など、無形で根本通念的な性質こそがカウンターカルチャー的思想の核となるものであり、これらを重視する考え方や価値観こそがカウンターカルチャー的共同体文化の主要な構成要素なのである。ゆえに、この考え方や価値観の共有の度合いが、カウンターカルチャー的共同体成員の安心感や充足感にも似た共属意識の強さに影響を及ぼすのである。そして、カウンターカルチャー的思想とその実践としての共同体生活双方によってカウンターカルチャー的共同体文化は構築されている。したがって、カウンターカルチャー的共同体からの出入りは、カウンターカルチャー的思想からの出入り、および、カウンターカルチャー的共同体の生活様式からの出入りという二重の出入りを意味する。つまり、カウンターカルチャー的共同体は一般社会の中に隔絶的空間をつくり、自分達の価値観に見合う社会を築いているのである。特定の人々を囲い込み、自ら社会的マイノリティとなることで生み出されるこの隔絶性こそがカウンターカルチャー的共同体の対抗性を最もよく示す性質であり、ここに出入りすることはすなわち、一般社会からのドロップアウトを意味する。

以上の特徴から、カウンターカルチャー的共同体は性質的、文化的に一般的共同体、あるいは一般社会とは異なると同時に、社会生活に対して問題意識を投げかけるカウンターカルチャー的思想を具現化する思想共同体である。そこに集うのはメインカルチャーから距離をおき、生きることについて再考しようと考える人々である。彼らは、現代社会におけるメインカルチャーである資本主義、物質主義に対抗しうる「共生」を模索しながら、「よりよい生き方」を追求する価値観を提示している。カウンターカルチャー的共同体はこうした思想に共感する者だけの共同体であるので、社会的には「安定」した性格を持つものであり、日常生活において相互依存関係を維持しながら

「共生」を目指す自治的な人間集団である。

第3章　カウンターカルチャー的共同体の文化

1．理想的共同体観に基づくカウンターカルチャー的共同体の分類

本章では、カウンターカルチャー的共同体像を分類し、それぞれの共同体の特徴的差異を捉えやすくするとともに、カテゴリーを越えて共通する共同生活の特徴を明らかにしたい。

カウンターカルチャー的共同体が目指す方向性を大別するならば、自分自身の意識拡大を目指し、“do your own thing”をモットーとする「隠遁型」や「エデン指向型」と、トゥギャザーネス[29]が目的の「奉仕型」や「ユートピア指向型」に分類される。これはカウンターカルチャーの2つの主な特徴を最もよく表すものである[30]。

ここで注意すべきことは、「隠遁型」がすなわち破滅型共同体を示すものではないことである。「隠遁型」の共同体は、その思想、生き方の純粋さを維持するために、メインカルチャーと距離をおき、一定の隔絶性を持って生活する形式をとっているのであり、退避的純粋指向型共同体などと分類するのが適切である。共同体の中で、「権威主義的構造」［メルニク 1990:120］に陥ることなく個が尊重されているか、思想が過度に内向的になりすぎて出入りの自由を制限し、排他的になっていないかという点が、自滅型か否かを判断する基準となるだろう。つまり、「隠遁型」は「奉仕型」の対極に位置しながらもそれとパラレルな関係性を保つカウンターカルチャー的共同体である。「奉仕型」が共同体の成員として活動し、個人をエンパワーメントしていくことで社会を変革に向かわせることを目指すという、比較的マクロな改革行動であるのに対し、「隠遁型」は個々の精神や生き方の昇華によって共同体をよりよいものにし、共同体自体を崇高な空間にしていこうとするミクロな部分から出発する改革行動である。

次に、理想社会実現の方法に注目するカウンターカルチャー的共同体の分類では、「東洋宗教型」、「キリスト教型」、「心理型」、「リハビリテーション型」、「協同型」、「代用家族型」、「政治型」がある[31]。1960年代には既存のキリスト教から脱却してヒンドゥー教や仏教、儒教などの東洋思想を取り入れて意識拡大を図ろうとする動きが広まった。チベット仏教の『死者の書』、老子、禅、ヨガなどの経典がヒッピーの間でよく読まれた。また、カウンターカルチャー的共同体には、しばしば核家族を否定し、非血縁的な拡大家族を志向する傾向があった。これは、血縁による家族集団が他集団へ

の差別を作り出すことと、先進国において核家族が進学競争と出世主義という害悪を生み出しているという理由からであった。それゆえ、共同体によっては協同育児やグループ結婚、フリーセックス、集団討論会を実施するところもあった。さらに、自然環境との共存を追求するヒッピーによって有機農業による自給自足の生活を旨とするカウンターカルチャー的共同体も多く組織された[32]。

ここでの分類に関して、共同体が目指す方向性に基づく前者の分類は共同体としての実践論的分類であり、理想社会実現の方法に注目する後者の分類は共同体内部で用いられる方法の理論的分類である。この理論的分類と実践論的分類という並存する 2 つの分類体系、すなわち、どのような思想を用いて、どのようなスタンスの共同体を目指すかという目標の組み合わせによって、カウンターカルチャー的共同体の性質は多様化する。しかし、それらのカウンターカルチャー的共同体における共同生活の特徴の差異と共通点を捉えやすくするために、ここで大まかな分類形式を示し、カウンターカルチャー的共同体の系統分類を行う必要がある。

キンケイドは、1960 年代のアメリカで形成されたカウンターカルチャー思想に基づくコミューン（カウンターカルチャー的共同体）に関して、以下のように分類している。

> 追求される理想を大雑把に分け、その基準をもって現在行われている共同体の実験を分類することができる。まず政治的コミューン（主に都市において）。これは近隣にたいする政治的働きかけが中心課題になっているものであり、参加者は彼等の属するコミューンが永続的もしくは重要なものとは見ず、むしろ経済的便宜あるいは共鳴できる雰囲気としか見ないだろう。次に、古典的ユートピアの伝統を継ぐコミューンがある。これは外の世界のための規範になることを信じ、意識的に生活共同体の計画をすすめるものである。第三の型として、宗教的コミューンがある。強力な指導者・教導者を求めて人は集まり、魂・意識のあり方に主たる関心が示される。この中に、規律・麻薬・東洋的儀式を持つ神秘的集団を含めたい。最後に、安らぎを求めて密接な「家族」を形成する人びとの集団がある。このような集団は、普通、自らを社会の規範とは考えない。彼等は彼等が是認することのできないアメリカ社会からの脱落者と自らを見なし、土地に戻り、自給自足の生活をし、他者との関わりを最小限にとどめることによって純粋たら

んと欲する［キンケイド 1973:11-12］

キンケイド自身はツゥイン・オークスという古典的なユートピア指向型コミューンの創始者である。キンケイドのコミューン観は実体験に基づくものであり、その見方は、カウンターカルチャー的共同体を分類するものとして説得力のあるものである。また、ここで示された「政治的」、「ユートピア指向」、「宗教的」、「家族的」という分類の仕方は、共同体活動の基調となる特徴を的確に示しており、アメリカという空間の枠と、1960年代という時間の枠を取り払った場合にも、種々あるカウンターカルチャー的共同体を系統付けるものとして有効である。したがって次節では、この分類枠組みを利用し、さらに、近年の社会状況の変化によって生まれてきたエコ・ビレッジ運動を「エコロジー指向」という新たな分類として加え、カウンターカルチャー的共同体を「政治型」、「ユートピア指向型」、「宗教型」、「家族型」、そして「エコロジー指向型」の5つに分類し、その具体的事例を挙げる。その上でカウンターカルチャー的共同体のライフスタイルの実態を記述し、それぞれの共同体における共同生活の特徴を伸べる(33)。なお、以下では主に日本の共同体を取り上げるが、「エコロジー指向型」共同体に関しては、現在、スコットランドのフィンドホーンが国連からもその役割を高く評価され、国際的な注目を集めているのに加えて、共同体としての歴史も長く、習熟した共同体文化が醸成されていると考えられるため、海外の共同体ではあるが、それを取り上げる。

2．カウンターカルチャー的共同体生活

(1)政治型

まず、弥栄之郷共同体（以下、「弥栄」と略記）を取り上げる。「弥栄」は島根県那賀郡弥栄村横谷地区笹目原にある。横谷地区は弥栄村の中でも奥まったところにあり、笹目原はその中でも最奥部に位置する。「弥栄」はそこにプレハブ住宅とバラックを建てて形成されていた。1975年にそこを訪れた今によると、暮らしていたのは20歳代の若者で、野菜、椎茸、米、果樹栽培など農業や養鶏を行っていた［今 1987:176］。

1972年の発足当時、「弥栄」は単独の孤立した存在ではなく、「コミューン百人委員会」と名乗る運動体の一部であった。同委員会は大阪に事務局を置き、「弥栄」の他に、滋賀県朽木村に「ゆまにて共同体」を建設し、共同体農産物供給センターやワークキ

ャンプ活動の基地「アミティエの家」などにおける活動を行っていた[34]。ただしこれは、運動全体に命令を出す政治司令部ではなく、また外部からの共同体支援団体でもなかった。彼らはコミューン百人委員会自体を共同体運動の現場の1つとし、都市に住んでいても共同体社会の建設という共通の目的のために協同で活動した。これにより、運動への参加が「共同体内部に住むこと」を意味することを否定し、より多くの人が運動に参加できる形態を取ることで、共同体自体が排他的で閉鎖的な集団になることを避けたのである。したがって、大阪で機関紙の発行などの宣伝活動を行ったり、「弥栄」で生産された椎茸を販売したり、資金稼ぎのためにビルのガラス拭きの仕事をすることも運動の一部であるとされた[35]。

こうした考えに基づき、コミューン百人委員会の運動では、国家という権力的な集団形態と、家族という閉鎖的な集団形態の2つを中心とする社会に対して、コミューンという新たな集団形態を対置した。そして複数の共同体のネットワークが、社会あるいは国家の代替物として政治機能さえ果たすことを可能にすることを目指した[36]。彼らにとって「弥栄」の運動は生活単位であり、生産形態であり、人間関係の哲学であり、主義であり、何より生きていく上での志だったのである[37]。そして、「弥栄」では管理社会を否定し、自治による社会を実現するために、会計や事務処理などの管理能力を学び、経済合理性を追求した経営管理を行った[38]。

彼らの活動目標は、村に積極的に入り、「近隣社会を『コミューン化』すること」[今1987:176]であった。すなわち、「弥栄」が村に働きかけて村全体に思想を伝播し、村と一体化することを目指したのである。そのために、自家生産の野菜だけでなく、近隣農家が生産した野菜を広島の団地で販売する直販活動と、「弥栄」のメンバーが近隣の百姓との共同作業によって野菜を生産する共同耕作を行った。ゆくゆくは土地を中心とする生産手段の共有化と、出荷作業や農作業などの共同労働によって、部落内の互助組織から部落へ、さらに弥栄村全体へと共同化を推し進め、過疎村に社会革命をもたらそうとしたのである。

その後、コミューン百人委員会はメンバーが関わる他事業の多忙化が進んだことで活動を停止してしまったが、「弥栄」自体はワークキャンプの開催によって常駐メンバーを増加させた。生業については、和牛の牧畜や村の女性たちとの協同によるみそ作りを開始しただけでなく、休耕田や山林を開墾し、村の人々との共同生産も進めた。

「弥栄」は1989年に有機農業法人「やさか共同農場」として法人化し、みそ製造、

畑作、水稲、豆腐製造などを生産活動の中心に据えながら弥栄村の村民と協力した村づくりと有機農業運動に取り組んでいる[39]。また、その内部に NPO 法人「ふるさと弥栄ネットワーク」を組織している。ここでは「有機農業の認証を通して地域の再生システムづくり事業」、「UI ターンの促進と定住に関する推進事業」、「三隅川流域の資源を活用した環境保全型の領域活性化事業」、「都市農村交流運動を通した地域産業の活性化と地域振興事業」を軸に、地域社会の自立に貢献することを目的として田舎暮らし希望者の体験コースや、留学生との交流、若者のための地方生活体験交流プログラムなど、村内および地域一円を巻き込みながら都市・農村交流、定住、環境保全、有機食品などをテーマにしたまちづくりの推進活動を行っている[40]。

「弥栄」によるこれら一連の運動が弥栄村の生活に与えた影響は大きく、見方によっては「弥栄」による村の「乗っ取り」という構図にも見える。しかし、「弥栄」が持ち続けてきた理念は、「コミューンによる丸ごとの社会変革」[41]であり、「人間と集団の自由な連合による、社会の構造全体の変革を目指す」[42]思想であった。つまり、集団の中で日々自分を問い、ひたむきに自己変革を目指すことを通して集団として成長し、社会変革へ結びつけていこうとする集団なのである。この精神は「ぼくらは、無理に棒でたたいて柿の実を落とすようなことは、絶対にやらない。ぼくらもむらという柿の実の一部になりきり、むらの人たちとともに成熟していく道をとっている」[43]という成員の語りにも表れている。

そして、共同体内の生活においては、全体として会計を 1 つしか持たない「一つ財布」の下で、仲間を慕い、生活も仕事も一緒にしながら、外部の社会とは異なるみんなが「人間」として付き合える、生き生きとした「もうひとつの社会」をつくることが目指された。この生活はそれぞれの事情を認め合い、お互いの意志を確かめ合い、つながりを確認しながら、一つ一つの判断や行動について「共同性」(一緒にすること)とは何なのかを問い直し、個人と個人の人間関係をつくろうと努めるものであった[弥栄之郷共同体 1989:22-23]。

こうした暮らしを通して、「弥栄」で生活する人々は、共同生活の良さや農村で暮らすことの安らぎを感じると同時に、外部社会に対する関心を高め、「人間としての生き方」[44]を変革させてきた。そして「弥栄」における共同生活の意識は着実に弥栄村全体に影響を与え、外部社会と連動した活動を成功させている。ここには、共同体内部で個々人が他者との関係性を向上させる生活を目指す一方で、共同体として強い政

治的意図を持ち、積極的な社会への働きかけにより、社会変革を目指す政治型共同体の特徴がよく表れている。「弥栄」は共同体内部の変革思想を外部に発信し、共同体自体が変革を実践してきた政治型カウンターカルチャー的共同体の典型である。

(2)ユートピア指向型

次にユートピア指向のカウンターカルチャー的共同体である新しき村と山岸会を取り上げる。

武者小路実篤は理想的な調和社会の実現を目指して、1918 年に宮崎県児湯郡木城町に新しき村を建設したが、1938 年にダム建設により村の大半が水没したため、1939 年に埼玉県入間郡毛呂山町に新たに新しき村を建設した[45]。その際、宮崎から埼玉に移住した村員は 2 家族 12 人だけであった[46]。彼らは皆農業に不慣れだったが、新たに加わる村員たちと協力しながら、養鶏を中心に稲作、茶、梅などの栽培を中心に自給自足的共同体を築いてきた[47]。

新しき村において共有されてきた精神は、「全世界の人間が天命を全うし各個人の内にすむ自我を完全に生長させることを理想とする」[48]ことである。すなわち、世界中の人々がそれぞれの生き方について考え、その実現のために自分自身と向き合い、向上心を持って生きることを理想として掲げていたのである。そして、この理想を全人類に普及させることを目指し、またそのために自分たち自身の生活をこの理想に合致させることを目指してきた。ひたすらに理想の現実化を求めて活動してきたのである。

特に創設当時は、参加者の多くが勤勉な知識青年たちで、新しい全体的な生活改革への情熱に溢れていた。彼らにとって、「いかに生きるべきか」が重大かつ求道性のある課題であった。このような青年たちにとって文学は生きる指針を与えてくれるものではあったが、課題を実際の生活の中で実践に移せる「村」は文学以上に、周囲の因襲に満ちた社会との対比の中で魅力を増し、求心性を強めたのである[今 1987:95-97]。

その後、今日に至るまで武者小路が目標として掲げた「自分も生き、他人も生き、全部も生きる世界」、「一番あたりまえの人間らしい世界」というユートピア的社会を築き上げるべく活動が続けられ、その様子は機関紙『新しき村』によって発信されている。2006 年現在、村内生活者[49]は 23 名だが、日本全国に約 200 名の村外会員[50]が存在し、活動を支援している。原則的に入村は自由だが、精神的適性や村の経済的事情により、必ずしも希望者全員の入村が認められるわけではない[51]。ここには村が共

同体として一定の秩序を保つための保護機能的側面が見受けられる。生業は現在も農業が主体であり、採卵養鶏、椎茸、稲作、野菜の栽培を行う。また季節ごとに筍、茶、梅、柚子、銀杏、柿などを収穫し販売する他、土壌改良剤としての鶏糞も販売している。加工品としては、梅干、梅サワー、ゆで卵、竹炭、飾りひょうたんなどがある。これらを村の売店で販売するとともに、村外へも出荷している(52)。農業中心の自給自足共同生活の中で、各成員が義務労働(53)を行いながら、絵画や陶芸などの芸術活動を行っている(54)。また、生活費はすべて村で賄われ、子供たちの教育費も高校までは村が負担する(55)。

村員は共同体生活において互いに「兄弟姉妹」と呼び合う。新しき村では、全員が労働に参加し、各々の望む芸術分野で自己を生かすことを使命とするのであり、いわば生活の全局面で各人が一個の人間として平等と考えられているのである［今 1987:97］。

「兄弟姉妹」の関係はカウンターカルチャー的共同体の成立条件の1つである。このような関係は集団の平等性を前提にしたもので、何よりも集団成員の「無差別化」、すなわち「主体間の差別意識の消滅」を意味する［村田 1999:88］。

そうした中でもちろん問題も発生する。それは共同生活に支障を来たすものである。村において個人と個人を繋ぐものは友情であり、愛情である。その相互関係を築く要素としては個々人の成長に主眼が置かれていたが、それを保障するための社会制度にはさほど関心が払われていなかった。そこにあったのは、個人の善意、あるいは自発性への信頼とリーダーである武者小路の権威であった［今 1987:104-105］。つまり、ユートピア的共同体という共同体のあり方を重視するあまり、村における「個人と集団との関係のあり方」についての基本的理念の脆弱さに問題があったのである。しかし、その一方で、新しき村では村内に「兄弟姉妹」関係を構築することで、共同体としての指向の共同性を高めると同時に、共同体内の各成員の間に調和のとれた共生関係を生み出しているのも事実である。

新しき村同様にユートピアを指向するカウンターカルチャー的共同体でも、山岸会における生活は個人の理想追求生活と共同体原理についての規則性がより強い。山岸会は1953年に山岸巳代蔵によって京都で発足した。当初は、合宿を通して山岸会の思想「ヤマギシズム」を体験的に伝播するヤマギシズム特別講習研鑽会（いわゆる「特講」）の開催が主な活動で、それを受講した会員（主に農民）が増えるにしたがって山

岸会の支部は全国に広がっていった。特講は関西地方では頻繁に開かれ、関東地方でも開催されるなどの活況を呈し、受講者は1957年だけで2,500人に達した[56]。そして、1959年に会員有志が全財産を出資し、家族全員を引き連れて三重県四日市市に集結し、「無所有共有の一体社会」の建設を目指して共同体生活を開始した［水津 1971:144］。

「ヤマギシズム」とは「無所有・共用・共活（あたかも、太陽や空気が誰の所有物でもなく、誰もそれらを所有しているとは考えていない、生けとし生きる物すべてが、その恵みを共に用い、共に活かしている状態）の生き方によって、全人（自己を含む現在および将来の全人類）幸福の『真実社会』を実現することができるとする」[57]イデオロギーで、山岸会活動の行動原理である。そして、山岸会では「世界急進Ｚ革命」と称して、外部の一般社会における「ヤマギシズム」の理解を促進する「特講」などの活動を推進しているのである。

山岸会における共同体生活の特色は、山岸が提唱した山岸式養鶏法と「研鑽」に象徴される。山岸式養鶏法の核心は「鶏の生活の場である鶏舎を鶏にとっての理想社会にすれば鶏は幸福になる。そして幸福な鶏こそが最高の卵を生む」という考え方である[58]。山岸会では「幸福な鶏」を育てるために、鶏舎の構造から餌の配合や与え方などにさまざまな工夫を凝らしている。例えば、雛に餌付けする際、屑米を敷き詰めた上に雛を放つ。餌がいくらでもある豊満な世界で生活させることで雛を安心させ、争いや餌を食べ過ぎることのない鶏群を作り出すのである。また、ここでは鶏とそれを管理する人間の関係が重視される。山岸式養鶏法の考えによると、人間と鶏が相関関係にあり、幸福な状態の人間が飼う鶏は幸福になり、ストレスの多い人間が飼う鶏はストレスを感じやすくなる。したがって、「幸福な鶏」を育てるためには、人間が幸福な生活を送っていなければならない。ゆえに、山岸会では争いがないこと、健康的な生活ができること、夫婦間の和合、親子関係の良好なあり方など、人と人、あるいは人と鶏の関係を含む自然界の万物との一体化を実現する理想社会を目指すのであり、同時に、その思想の本質は鶏舎の中に組み込まれているのである。

そうした共同体社会を実現するために、個々人には「研鑽」が求められる。「研鑽」とは「最後にやることはこれしかないということを発見する」［今 1987:134］ことである。つまり、日常における生活や活動に関するすべての事象に関して、一つ一つ突き詰めて考え抜き、自分が納得できる唯一の結論を導き出しながら生きていくことが求められているのである。『にっぽんコミューン』［アサヒグラフ 1979］の中で、この

「研鑽」は山岸会の問題的な特徴として挙げられている。実顕地[59]では、その長時間の労働の合間に頻繁に研鑽会が開かれる。仕事も生活も、網の目のように張り巡らせた研鑽会の積み上げで運営していくのが山岸会生活の特徴で、すべて研鑽会での徹底的な話し合いによって進める。しかし、アサヒグラフにおいて「会員のものの言い方、笑い方などに、奇妙な同一性がある」[60]ことが指摘されているように、この日々の研鑽の連続で、山岸会の人間は均質化している。これに加え、山岸会の人びとの「娑婆」という発言にも注目すべきである。「娑婆」とは山岸会内部の世界に対して、「俗世」、すなわちメインカルチャーの社会を指す言葉である。確かに、「無所有一体生活」という理念に根ざす共同体で生きることは、「娑婆」とは異なる感性や人間関係のもとで生きるということであり、ここに外部社会との差異意識が確認できる。

1959年には、この共同体内外の意識の差異および生活様式の差異が原因と考えられる事件が発生した。いわゆる「山岸会事件」である。この事件では、成員の親族による「家族が不当に監禁されて強制的に講習を受けさせられている」とする訴えが警察に相次いだことをきっかけに、山岸会は警官隊によって一週間包囲された。そして合宿形式の特講が拘束監禁に当たるとして強制捜査を受けたが、各成員および特講参加者は自発的に山岸会での生活に参画していたのであり、そこには「不当監禁」の事実はなかった［今 1987:137-138］。これは内部の人間の参画意識と外部の人間の山岸会生活に対する認識の差異が、山岸会のイメージを一種の社会的「悪」として作り上げたことに起因する事件であった。

このように山岸会とメインカルチャー社会との間には、外部との意識の差異による軋轢が生じているが、それは自分たちだけの閉ざされたユートピアを目指すコミューンではない。全世界を「無所有一体社会」に変えていくことを目指す「世界急進Ｚ革命」を掲げ、絶えず「娑婆」に働きかけ続けている運動体なのである[61]［村田 1999:54］。

現在の山岸会は、三重県伊賀町の春日山実顕地（山岸会本部）や同県津市の豊里実顕地（山岸会本庁）を中心に、日本に39ヶ所、海外に7ヶ所の実顕地を展開しながら、有機農法を主体とする大規模な農業生産活動を行っている。1990年時点で、1,800人が参画し、全国に農産物並びに加工食品販売組織を持ち、農産物を全国的に販売することを通して農業を企業経営的に展開している。ここでは日本社会の縦割り制度は否定され、横のつながりとしての人間関係による生活が営まれている。職場は半年交替制を採り、しかも夫婦単位を原則とし、運営組織の中に長と名のつく役職者はいない

［水津 1971:137; 村田 1999:53-54］。

組織としての生活様式は、「一体生活（単に、複数の個人が集まった共同生活でも協同生活でも共働生活でもなく、不可分な構成要素として各人が一体に溶け合った『財布ひとつ』の生活）」をしながら、農業、畜産、林業を中心とした生産活動を行っている[62]。これは、衣服をはじめ、あらゆるものの所有を放棄し、すべての財を共有しているということである。基本的には、必要なものは実顕地内の生活用品供給所で調達する。その際、代金の支払いは必要ない。そこにないものについては係の者が買ってくることになっている。成員はどの実顕地においても無給であるが、衣食住が確実に保障され、原始共産制的な生産実践が行われている。これにより、実顕地では衣食住すべてにわたってユートピア的な「金の要らない村」が実現しているのである[63]。

以上、2 つのユートピア指向型の共同体の実態を述べた。どちらも理想とする社会像を前面に打ち出したカウンターカルチャー的共同体である。ゆえに共同体外部のメインカルチャーとの間に価値観の相違があるために、山岸会においては、外部とのギャップが生み出す摩擦によって隔絶性が見られる。しかし、双方ともに、外部の人々に対する受容意識を持ち、共同体として拡大していこうとする姿勢を持つ。これらはあくまでメインカルチャーと共存する中で成員間の共生関係を高め、共同体としてのユートピア性を向上させようとするカウンターカルチャー的共同体である。

(3)宗教型

宗教型カウンターカルチャー的共同体の代表例は、一燈園である。この集団は 1910 年代に西田天香と彼のカリスマ的資質に惹かれた人々を中心に結成された。1998 年からは、天香の孫西田多戈止を中心に、西田天香の理想を追求しつつ「懺悔奉仕」の共同生活を行っている［村田 1999:53］。

一燈園は京都府京都市山科区四ノ宮柳山町にある[64]。「林内」[65]には大小あわせて 70 棟以上の建築物がある。1980 年代に住人の数は約 100 世帯、300 人程度であったが、高齢者が世を去るにつれて、1997 年時点で 150 人にまで減少している［村田 1999:124-125］。

一燈園では、すべてのものは「光」（おひかり）からの預かりものとされる。「光」とは西田天香が作った字で、「現実の生活をも救う神または仏のこと」[66]である。一燈園は財団法人「懺悔奉仕光泉林」として登記されており、宗教団体ではない。しか

し、神・仏・大自然を信仰し、仏教やキリスト教、自然崇拝などを宗教的信念体系の源泉として、「光」を崇拝する宗教共同体の様相を取っている点に宗教的影響が強く認められる［水津 1971:61; 村田 1999:53］。

「光」とともに一燈園住民の信念体系を基礎付けるものは、「般若心経」である。一燈園では、この「般若心経」をもとにした一燈園生活を実現するために、この経の示す理想をさまざまな儀礼や活動に結びつけている。「般若心経」では、その根本思想に存在する「布施」、「持戒」、「忍辱」、「精進」、「禅定」、「智恵」の6つの徳を実現すれば、理想の世界が達成されると考える。すなわち、この六徳の実現によって、個人は行き詰まりから解放され、争いのない平和な社会に到達するとされる。具体的には、何よりも「礼拝（おがむ）」、「下坐（へりくだる）」、「奉仕（ささげる）」、「慰撫（なぐさめる）」、「懺悔（あやまる）」、「行乞（許されて生きる）」の6つの行為が大切であると説かれている。これらの行動が、現実社会における「無所有奉仕」の「懺悔の生活」に収斂されるという。「下坐」は、一燈園をもっとも有名にし、そのシンボルとされる「行願」（便所掃除）に意味を与えるものである。「生活の中から平和を、争いの起こらぬ経済生活を実現する」という一燈園の根本的な願いは、この「下坐」および「へりくだる」に発する。人間が自らの位置付けを低くし、へりくだる場合には生存競争の起こる余地がなく、争いの火種は消滅する。他者に奉仕し、困窮者を助け、自分の罪を懺悔する一燈園の生活は、日々の生活における「般若心経」の「六行」を積むことを目標とした生活なのである［村田 1999:130-131］。

こうした生活の中で実践の中心となっているのが、「行願」と「路頭」である。すでに記述したように「行願」すなわち便所掃除には、便所を拝み、へりくだって自分を捧げること等の「六行」の精神が集約されており、そこには一燈園の信念体系の全体が裏打ちされている。また、「路頭」とは、「他人に無償で仕事をさせてもらうこと」である。一燈園が創設された当時、何も所有していなかった西田らは、日々、外で仕事をさせてもらい、食事もその「路頭」先で調達した。現在は一燈園自身が多くの事業経営を行っており、そこで働くことが「路頭」とされている［水津 1971:66; 村田 1999:134］。「無所有」並びに「無償奉仕」を体現する実践的行為が「路頭」であり、一燈園生活の核心なのである。

この生活は林内で運営されている株式会社事業によって支えられている。一燈園の組織には、一燈園生活を広める目的を持つ「宣光社部門」と、信念体系の直接普及、

または布教に関わる教学部門としての「一燈園部門」とがある。宣光社部門は一燈園に財政的存立基盤を与える経済諸事業の中心である。宣光社部門で特筆すべきは、国による種子取り扱い業者の認定を受け、種苗の研究販売、農業啓蒙活動、農業技術指導などを行う「のうけん」、印刷活動としての「燈影舎」、設計施工の「燈影設計工務」があり、この三者が一燈園財政を支えている。それぞれの事業所には、「林外」から働きに来ている人も多い。また「すわらじ劇園」も全国各地で公演しながら一燈園精神の普及に努めている。これに対し一燈園部門には学校経営と研修会の実施、および出版活動が含まれる。具体的には「いずみ幼稚園」と「燈影学園」の経営である。そこでは林内子女に教育を施すだけでなく、いずみ幼稚園では林外からも園児を受け入れている。また燈影学園では、京都の国公立大学の教員たちが無償で教壇に立つこともある。そのほか、一燈園精神の習得を目的とする智徳研修会が、企業の新入生オリエンテーションや社員再教育に用いられると同時に、その精神に共感する多数の企業家によって一燈園の活動は支援されている［水津 1971:71,96-97; 村田 1999:124-126］。一燈園はさまざまな事業の展開と積極的な一燈園精神発信の場を設けることによって、林外社会との共生関係を構築している。

一燈園では林内において互いに「同人」と呼び合う。同人には制度上、上下関係も支配／被支配の関係もなく、全員が平等である。しかし、100 人を超える同人を組織として維持し指導していくためには最低限の組織構造があり、「当番」といわれる指導的人物が一燈園を実質的に運営している。林内で暮らす同人の他に全国各地には「随喜者」や「路頭人」と呼ばれる同人がいる。彼らは林外で一燈園の思想を実践する生活を送る人々で、林内の同人は彼らの自律的な活動に敬意を表する［村田 1999:123］。そして、林内においては「一つ釜戸、一つ財布」(67)という言葉が象徴している通り、共同体全体で生計を共有し、同人の一体性を確固たるものにしている。

こうして築き上げられてきた一燈園生活について、元京都工芸繊維大学教授の豊島覚城は次のように語っている。

> 一燈園においては同人たる成員各自がそれぞれ自発的自覚的に道を求めて、天香さんの足跡を慕い、各々相携えて共通の理想を実現し、自己の信念を貫こうとしているのであるから、その限りにおいて各個人は唯盲目的、無自覚的に全体の中に没入し、全体のために個人を犠牲にしているのではない。さりとて個人が自

我中心的に行動し、自己の利益のみを追求して全体の生活を軽視し、無視し、或は単に一燈園生活を手段視するような不心得者は一人も同人中に居ない筈である［水津 1971:75］。

つまり、一燈園生活においては、各成員が自主的に理想とする生き方を追求する姿勢が養われると同時に、他者との関係性を意識しながら共同生活を営む資質が育まれているのである。

一燈園は信念体系に仏教思想を取り込んでいる。またそれは、カリスマ的教祖の西田天香が語る思想のもとに集った人々による、宗教的要素の強いカウンターカルチャー的共同体である。加えて、その思想の普及にも積極的であると同時に、その思想を支援する企業や団体が存在するなど、林外における一燈園精神の社会的評価も高い。だが同じ宗教型カウンターカルチャー的共同体でも、紫陽花邑の生活に見られる特徴は、宗教的思想の信仰という点において少し異なる様相を呈する。

奈良県の紫陽花邑は 1945 年に矢追日聖（日聖法主）によって結成された。日聖法主は天の啓示を受けて古代大和思想を源泉とする宗教法人「大倭教」（1954 年認証）を立教し、1947 年頃から大阪の繁華街で街頭布教に立つようになった［村田 1999:54］。当時、街には戦災孤児や浮浪者が溢れ、誰もが困難を抱えながら生きる時代であった。日聖法主は街頭布教の折に戦災孤児や浮浪者を連れて帰り、共同生活を開始した。紫陽花邑は前科のある者も犯罪者も、来る者を拒まず、社会から落ちこぼれた人々の「吹きだまり共同体」として出発した(68)。

大倭教の根底にあるのは、「人間は誰もが自然に生かされている」、「我々は皆宇宙心から分かれてきた人間である」とする霊的感応を基礎とする古代大和思想である(69)。日聖法主は、「弥生時代の古代日本、国家という権力機構が人々の頭上にのしかかる以前、むらは農耕中心の共同生活だった。人びとの生活は『明るく直き心』で『神のまにまに』あり、共同生活それ自体が信仰であった。それはまた、はみ出し者を追放しない、おおらかな社会だった」(70)と想起し、そのような「仏教渡来以前の、自然宗教としての古神道と古代共同体」(71)を目指そうとした。こうした思想に基づく大倭教の実践生活の場が紫陽花邑なのである。その語源は一つ一つ色が異なる小さな花びらの集合によって一房の花を形成する紫陽花にあり、紫陽花のように成員が集い、力を合わせ、心通い合う場所を目指している(72)。

邑には「財布一つ」の大家族制を営む「大倭一門」と、経済面では独立しながら邑に住む「隣保家庭」とがある。生業の中心は、初期の頃は自給自足的農業であったが、人口が増えるにつれ、宗教法人大倭教の事業部という形式をとって、工業や建築業に移行してきた。

その中心的なものが社会福祉法人大倭安宿苑である。1956年に奈良県からの要請を受けて設立された安宿苑は、現在、重度心身障害者療護施設「菅原園」、心身を病んでいる要保護者の救護施設「須賀宮寮」、寝たきり老人の特別養護老人ホーム「長曾根寮」を経営している[73]。また紫陽花邑は「交流の家」というらい回復者社会復帰セミナーセンターも経営している。これは、1960年代の前半、福祉施設への労働奉仕のために邑に入ってきたFIWC（フレンズ・インターナショナル・ワーク・キャンプ）関西委員会の学生たちによって建てられた[74]。その他、紫陽花邑では、宗教法人大倭病院、印刷業を扱う大倭印刷株式会社、不動産および建築業を扱う大倭殖産株式会社を経営している[75]。邑の住民は、これらの福祉施設や企業に勤務して給料を得る。そして大倭一門の人々は、給料をすべてプールして再配分を受ける、という仕組みになっている[76]。また、大倭一門は、日聖法主を家長とする大家族制ということになっているが、実際には、所帯を持っている人は邑の中の一戸建てに住み、共同体から各家庭に配布される食費によって家族単位で食事を作っている[村田 1999:54-55]。食費と小遣いは大人も子供も一律の金額が分配され、それ以外の費用については住居費は無料、教育費、衣服費、家具購入費などはすべて必要に応じて伝票を出して請求することになっている[77]。

この紫陽花邑の注目すべき特徴は、「宗教としての大倭教」[78]にまったく信仰も興味も持たない人も居住していることである。邑の中で誰が何を信仰していようと咎められることはない。これは大倭教の精神自体が「寛容」であることに由来する。日聖法主の思想は、神の重要性を説くものではない。日聖法主は「世間からはみ出すような人間が一緒に、みな仲良く生活していくこと」[79]こそが大倭教であると考えた。そして、犯罪者や障害者を含むあらゆる人間を受け入れ、同化させる開放的な性質を持つ共同体として大倭教の思想を体現している。

一燈園や紫陽花邑に見られる宗教型カウンターカルチャー的共同体は教祖の説いた宗教的価値体系によって成員個人の向上意欲が高められるとともに、その宗教的価値体系自体が求心力となって共同体の統合に寄与している点に特徴がある。

後者の紫陽花邑の例は、宗教型でありながら、次に挙げる家族型のカウンターカルチャー的共同体にも分類可能な性質を持っているという点で、興味深い。

(4)家族型

拡大家族的な共同体を形成してきたカウンターカルチャー的共同体に奈良県榛原町笠間の心境部落がある。心境部落の起源は、1940年に元天理教布教師尾崎増太郎を精神的支柱に4戸の農家が共同作業を始めたことにさかのぼる［村田 1999:54］。

貧しい人々から金を吸い上げ、その犠牲の上に成り立っている宗教家のあり方に疑問を感じ続けていた尾崎は、1936年に棄教した上、天理教の神棚を壊した。この行為に同調した村内の4家族と尾崎は村八分にされ、圧迫や嫌がらせを受けるようになった。そして、4軒の家は次第に農作業の共同化、炊事の共同化、そして生活全体の共同化へと進んでいった。生活を共同化した理由について、尾崎は次のように語っている。「共同化した方が経済的にええゆうことよりも、村八分にされてさみしかったから団結したんやな」[80]。つまり、心境部落は他の共同体とは異なり、理念や経済的利益の追求のために意識的に形成された共同体ではなく、厳しい村八分の孤立に耐えるためにメインカルチャーから離れ、互いに寄り添うように共同化へ向かった共同体である。

心境部落では私有財産の観念がほとんど消滅するほどに共同化が達成されている。労働に対して月給や小遣いは支給されないが、金が必要なときには、申し出れば使い道を問われることもなく申し出ただけの金が渡される。つまり、ユートピアの理想である「能力に応じて働き、必要に応じて受け取る」[81]ことが実現しているのである。

現在心境部落は、形式的には畳床生産で有名な生産部門の「心境農産」と、1966年に創立した社会福祉法人施設「心境荘苑（精神薄弱者援護施設）」からなる［村田 1999:54］。

心境荘苑は施設であるが、心境では精神薄弱者も健常者も同じ日常生活を送る。労働の場も、風呂も食事もすべて同じである。午前8時に仕事が開始され、炊事当番や洗濯係、掃除係などの内勤以外の人々は工場に出勤し、健常者も精神薄弱者も一緒になって作業を行う。精神薄弱者の中には1日中作業に手がつかない者もいるが、だからといって差別されることはない。心境部落の人々の表現によれば、「心境は管理社会ではなく、運営社会だから」である[82]。農産あるいは荘苑と区別されていても、それ

は法律関係のための区別であって、実態としての心境部落は、健常者と精神薄弱者が「共に生きる共同体」なのである[83]。

つまり、心境部落ではそれぞれが自分にできることをやればいいのであって、能力の高低は人間としての評価には結びつかない。また、心境部落の人たちは「反差別」や「障害者の解放」といった理念を口にしない。ただ自分たちがやむにやまれぬ選択として生きてきた「共に生きる」という体験から、「差別を超える関係」[84]を確立しているのである。

心境部落における生活は、「『人間は共同せんとあかん』という尾崎哲学」［村田 1999:54］と「風呂哲学」によって支えられている。これらは、「共同体というのは何十人が入浴した後でも風呂の湯が澄んでいなければならない」、また「後に入るもののことを考えて湯を濁さないように気をつける思いやりが共同生活を成功させる基本である」[85]という尾崎の考え方である。すなわち、共同体を存続していくには、外部からの圧迫に耐えると共に、共同体を構成する一人一人がエゴイズムを克服し、すべての人を公平に思いやる気持ちを持つという意識の変革が求められているのである。

心境部落は他者との関わり方を突き詰めたカウンターカルチャー的共同体である。もともと村八分の扱いを受けた人々や精神薄弱者など、一般社会では生活しにくい状況にある人々の集合体であり、キンケイドが「普通、自らを社会の規範とは考えない」、「社会からの脱落者と自らを見なし、土地に戻り、自給自足の生活をし、他者との関わりを最小限にとどめることによって純粋たらんと欲する」［キンケイド 1973:450］共同体として分類した家族型カウンターカルチャー的共同体の性質に合致するだろう。彼らはなんらの集団規則や家計簿などを持たない生活を営んでいる。その上、「来る者拒まず、去る者追わず」の理念を実践している。こうした性格が、一般的に共産主義を象徴する赤色とは対比して、「白い共産部落」［水津 1971:23］と呼ばれる所以だろう。

ところで、以上で述べてきたことを踏まえて心境部落の特徴を見てみると、心境部落は「尾崎哲学」に基づく崇高な共生思想を有しており、「農民のユートピア」[86]であるだけでなく、すべての人々との共生を理想とする「完全な共同体」［村田 1979:54］を目指すカウンターカルチャー的共同体であると言える。その指向様式は成員個々人の意識拡大を目指す「隠遁型」でありながらも、共同体全体としては成員相互のトゥギャザーネスの実践を目指す「奉仕型」の性質も並存させる形態を示すものである。

(5)エコロジー指向型

最後にエコロジー指向型のカウンターカルチャー的共同体の事例として、フィンドホーンについて記述する。

フィンドホーンは、1962年に、ピーター・キャディ、その妻アイリーン・キャディ、彼らの3人の幼い子どもたち、友人のドロシー・マクレーンの6人で始められた。ピーターがホテルの管理職を解雇されたことをきっかけに、彼ら6人は、1962年11月にピーター所有のトレーラーで北スコットランドのフィンドホーン湾キャラバン・パークに移り、そこで共同生活を始めた。共同生活の開始当初は厳寒の荒地で、狭い居住空間に耐えながら、霊感の強いアイリーンが神の声に従って瞑想して神からガイダンス（「内なる神の声」、啓示）を書き取り、それをピーターに伝えるという日々が続いた。一方で、不毛の荒地に菜園を作ると巨大な野菜が生育し、ドロシーがディーバと交信できるようになるなど、不思議な出来事が次々と発生した。これらのことがBBC放送によって取材・放映されたことを契機に、ニューエイジ的な意識の持ち主、ヒッピー、芸術家などが欧米諸国から集まり始め、共同体の規模が次第に大きくなり、今日のフィンドホーン財団の基礎が築かれた［ホーケン 1998:168-169,173,178-179; 寺山 1998:21-23］。

フィンドホーンにおいて実践が目指される生き方の原則は、「内なる神に従うこと」と「自然との協調」の2つである［寺山 1998:15］。ガイダンスやディーバといった観念に由来する神秘的体験が共同体形成の基盤にあることからもわかるように、フィンドホーンの2つの原則には精神志向性（宗教性とも言える）が顕著に表れている。発足以来、フィンドホーンでは日常生活を「人間」、「自然」、その間に存在する「自然の精霊たち」という3つの世界の連環として捉え、それらの協力関係の樹立を一貫した目的としてきた［ホーケン 1998:243］。したがって、外部から見る限りにおいて、フィンドホーンの思想は非常に神秘主義的である。しかし、農作業に適していない貧弱な砂地と冷たい海風に晒される気候からは通常育つはずのない植物が見事に育った［寺山 1998:22］。それに加えて、農業に関しては素人の集団であったにも関わらず、「ディーバの声が聞こえる人々」が聞き取ったというメッセージを元に農作物栽培を実行に移す度に、立派な作物が実ったという［ホーケン 1998:205-210］。これらが事実であるならば、彼らの思想が単なる空想と言い切ることは難しい。これらの現象に関して、一説にはフィンドホーンが「パワーポイント」[87]にあるため、そのエネルギー

を利用して、地上の生命はもとより、自分の周りの生命にも影響を与えることができるとする見方もある［ホーケン 1998:345,349］。

いずれにしても、フィンドホーンでは一般常識では説明できない不思議な現象の発生や、不思議な体験をする人々の登場が頻繁に起こってきた。これらの事象は外部社会のメインカルチャーにおいては異質なものとして扱われる非物質主義的思想である。そしてそうした事象が更なる国際的関心を高めるとともにメインカルチャーからドロップアウトした人々を引き付け、メンバーを増やしてきたのである。

1972 年、慈善教育財団となったフィンドホーンは増え続ける訪問者のために、フィンドホーンの生活を体験し、その理念が効率よく学べるプログラムやワークショップをつくり、教育機関として整備された。これにより、現在行われている体験週間システム(88)が確立された。この体験週間のプログラムには、人が心と魂と身体の絆を取り戻して生まれ変わるために必要な要素が凝縮されており、受講者はこれを通じて自分の殻を破り、新しい生き方を模索するのである。また、これを機に芸術家も集まるようになり、レコードが吹き込まれたり、演劇や版画、陶芸なども行われるようになった。現在では、フィンドホーンには約 450 人が定住している。ここに集まっているのは教育、環境、技術、健康、芸術、ビジネスなどさまざまな分野で活躍する人々である。彼らは歌やダンス、ゲームによって人との一体感を体験するワークショップや、世界各地の古代から伝わる儀式や瞑想によって自分の内面を見つめ、常に新しい生き方を模索する人々である。そしてこの共同体自体は、非営利の慈善団体として公認されたフィンドホーン財団が運営されており、メンバーは共同体内で仕事をすることにより生活費を得ている［寺山 1998:14-15, 48-50］。

加えて、1980 年代から 1990 年代にかけて、「エコビレッジ計画」が開始された。フィンドホーンにとってのエコビレッジとは、「精神・文化・経済そして環境面すべてを含めて、本来の生命の基盤である『真のつながり』を地球、そして世界レベルで見ていく、維持可能な村づくりのこと」である(89)。この計画理念に基づいて、それまで行われてきた有機農業やパーマカルチャー運動の他、エネルギー効率の向上と徹底したエネルギーと水のリサイクルが目指されるようになった。そして、共同体内にバレルハウスというウイスキーの巨大な蒸留樽を再利用した住宅や、自然の素材を使い、エネルギー効率も考えたエコハウスが建てられた。また、共同体の近くには、フィンドホーンの全電力の 20%をまかなう大きな風車を一基建てた。加えて、まだ実験段階で

はあるが、リビングマシーンという汚水浄化装置をヨーロッパで初めて設置し、稼動させている［寺山 1998:27］。これらの活動を通して、人と精霊、自然とのつながりを表現し、次世代へと手渡すことのできる村づくりを総合的に形作っていくことが、今後のフィンドホーンの課題である(90)。

フィンドホーンにおける生活の特徴は、消極的思考が厳しく禁じられていることである。その他に特筆すべき規則はなく、また外部から押し付けられる命令の束縛もない。これは、フィンドホーンという共同体全体が「祈りの実現の法則」の原理に基づいているからである。すなわち、フィンドホーンでは、「必要なこと」は完璧に叶えられるという完全な信仰によって運営されている。ゆえにここで重視されるのは、それが「いつ」叶うのかということであり、「もしも」ではない。「もしも」という仮定を立てる考え方は消極的であり、自己敗北であり、士気をなくさせるものと考えられるため、フィンドホーンでは無益とされるのである。したがって、そこにあるのは自分の中にある「内なる神」の存在を信じる意識を維持し、高め、さらにそれを日常生活の中で実際に証明するべく、不断に努力し続ける集団意識だけである［ホーケン 1998:60-61,64］。

このようなフィンドホーン生活において求められる資質は、創造的かつ積極的な考え方をする姿勢である。創始者であるピーター・キャディが、「人は誰でも自分の思うとおりの人間であり、自分の思うとおりの人間になれる。また、自分で考えていることが現実になる」［ホーケン 1998:74］という言葉をよく用いたように、フィンドホーンでは志向の実現を信じる肯定的思考が第一に求められた。これに加えて、フィンドホーンで生活する上では、集団として生きていくために個人のエゴイズムを放棄する資質も必要である。なぜならば、共同生活の中で、本当に重要なことを取捨選択することで、自分も生き、相手も生かすという相互の関係性を良好に維持することを可能にするためである［ホーケン 1998:24,63,74］。

これらの個人のあり方や生き方によって構成されるのが、「人間が諸精霊との協力と調和の新たな次元に入」［ホーケン 1998:203］ることを目指すフィンドホーンの文化である。フィンドホーンでは、調和こそが全宇宙を通じての法則だと考える。そして、対峙する存在（自然や精霊を含む）を完全に理解し、共感し、愛し、創造のすべてと一体化することで完全に調和した状態に入ることができるとされる。したがって、力による支配や、人間がすべてのものを人間の都合のいいように支配すること、ある

いは何ものかを強制したり、摂取したり、操作することによって、そのものの自己進歩の衝動を乱すことは避けられる。このことは人間に対しても植物や自然に対しても同様である。フィンドホーンでは、想念の力、および観念作用というものを意識する中で、人々はディーバを通じて、植物と親しく語り合い、植物と一体化し、「愛の役割」への深い理解を生み出してきた。そして、そうした植物界での教訓を人間の魂と心と肉体の世界に持ち込むことで、植物だけでなく、人間に対しても調和の取れた共同体を形成しているのである［ホーケン 1998: 203,274,280,304］。

以上のことからフィンドホーンの文化は、単に自然環境との調和を求めるハード面でのエコロジー意識ではなく、自然や、そこに存在しているという精霊、そして他者全体に対して調和の取れた生き方を目指す、内面的・精神的エコロジー意識を育むことを指向する。ここでは各個人が自由にライフスタイルの変革を行うことに重点が置かれる。そして、そうした人々が集まって共同生活を行う中で、意識や価値観を共有し成長する一方で、常にメンバーが入れ替わり、新しい訪問者が訪れ、フィンドホーンの文化自体も変化、拡大している［ホーケン 1998:203,274,280,304;寺山 1998:14］。例えば、体験週間プログラム整備による外部者受け入れの推進や「エコビレッジ計画」の開始などがその例である。したがって、フィンドホーンの文化は個々の成員レベルでも共同レベルでも向上性を持ち、双方の相互作用によってシナジー効果を生み出そうとする革進性の強い文化なのである。

フィンドホーンはユネスコや国連を通して教育（人間開発）の場[91]としても、環境に配慮したサステイナブル・コミュニティー[92]としても世界的に認められている。こうした事実は環境意識の高まりが著しい現代社会の動きを象徴する特徴でもあり、数あるカウンターカルチャー的共同体の中でも今日的意義が大きく、かつ現代社会において指向されるべきモデル社会の 1 つとして国際的注目度の高い活動である。

3．カウンターカルチャー的共同体の思想と共生文化

カウンターカルチャー的共同体を 5 つの分類に系統付け、その生活の実態を確認した。それぞれの共同体は、他の分類に当てはまる側面や他の分類にまたがる性格を備え、厳密に 5 つの分類に当てはめることは難しい。例えば、山岸会はユートピア指向でありながら、拡大家族的な「一つ財布」の生計による生活を営み、「世界急進 Z 革命」を掲げて外部社会への働きかけを行っている。さらにその生活は「ヤマギシズム」

の思想に基づくもので、宗教的である。また、フィンドホーンはエコロジー指向型のカウンターカルチャー的共同体だが、内部ではガイダンスやディーバなどを信仰しながら「調和」を重視する宗教的なユートピア的社会を形成している。それと同時に、体験週間プログラムやワークショップによって外部社会で暮らす人々に対して働きかける政治性も持ち合わせている。

これはカウンターカルチャー的共同体の実態が、その指向性とそれを実践するための実際の生活スタイルの組み合わせによって多岐にわたり、明確な線引きができないためである。カウンターカルチャー的共同体は、概して、理想社会を目指す「ユートピア性」、その理想に基づいて共同生活を行う「宗教性」、共同生活を行うという「家族性」、その中で内外社会の調和、協調を図る「エコロジー性」、そして、何らかの形で外部社会に働きかける「政治性」を持つ。これらは共同体の内部と外部を隔絶せしめている性質である。この隔絶性にはカウンターカルチャー的共同体において共有されてきた価値観が影響している。カウンターカルチャー的思想の核を成してきたのは生活のあらゆる側面を意識しながら生きる哲学的精神や、自然や人間関係を尊重する価値体系である。前者の哲学的精神はその精神論的思考様式によって「宗教性」を生み出すものである。また、そうした精神論的思考様式と自然や人間関係を尊重する意識は、「家族性」や「エコロジー性」を生み出すとともに、それらを結合させた「ユートピア性」を生み出す。そして「政治性」はこれらの価値体系の普遍化の手段として生み出されるものである。こうした価値体系はカウンターカルチャー的思想がメインカルチャーに対する対抗性を示す基盤である。したがってカウンターカルチャー的共同体は、その多少に関わらず、メインカルチャーとは一線を画する上記の性質を内包する複合的特性を持ち合わせるものであり、同時にこれらの性質がカウンターカルチャー的共同体文化の根幹を成している。

ではカウンターカルチャー的共同体文化の核をなす価値体系を形成する価値観とはいかなるものだろうか。

カウンターカルチャーが求めてきたのは自己変革と、それに基づく社会変革である［今 1987:218］。カウンターカルチャー的思想が問題視するのは、近代産業社会における科学的・合理的な社会体制秩序であり、そこにある物質主義や、「未来の名の下に現在を犠牲にする思想、生き方」［今 1987:25］は否定される。そしてカウンターカルチャー的共同体で生活する人々は、「既成の支配的な『文化』が持つ（社会本位）（未

来）中心の価値に異議を申し立」［渡辺 1982:103］て、「社会に合わせることではなく、自己をどうしたらいかすことができるか」［渡辺 1982:104］を追求してきた。つまり、カウンターカルチャー的共同体での生活は、メインカルチャーからドロップアウトし、「いま、ここで」［今 1987:38］生きることの実践である。彼らは、価値観の原点にある自己の直接的欲求に立ち返ることで、自己と他者、そして社会、ひいてはその未来を見つめようとするのである。

自己に立ち返る際、その手段の基礎となるのは「意識拡大」［Martin and Bruce 1992:396］である。これは「近代的な科学的・合理的な世界観のラディカルな相対化」［今 1987:10］により、個人と個人、個人と自然との関係を見つめ直すこと、すなわち自己変革（生き方の変革）である。今によると、自己変革はさまざまな弱さの克服と内面化させられた、さまざまな価値の克服であり、「弱さ」あるいは「価値」は何よりも「関係」の有り様である。「関係」とは、社会における無数の人々との関係であるため、「関係」の有り様の変革は内面でのみ起こるものではない［今 1987:218］。ゆえに、その方法は、人と人との「関係」を生きる中で変革していく以外になく、また人と人との関係は社会的制度を媒介にしている以上、制度の変革、すなわち社会変革が要求されるのである［今 1987:218］。

カウンターカルチャー的共同体の運動は、生き方の変革と制度（社会）の変革という 2 つの変革を結ぶプロセスとして共同体を構成し、個人と社会の双方に働きかける。今は、このような 2 つの変革に関する考え方を「関係革命」と呼ぶ。「関係革命」とは、男女の関係、子供たちとの関係、仲間との関係、地区との関係などの諸々の関係を、財布を 1 つにした共同生産・共同消費の生活の中で変えていくものであり、共同・共有生活の中で、エゴイズムを克服し、あらゆる差別と抑圧の根源である人間の相互不信を解消してゆくことである。

カウンターカルチャー的共同体において共同および共有が重視されるのは、「私的な所有は人間を愚かで一面的なものにする」［真木 2003:213］と考えられるためである。したがって、カウンターカルチャー的共同体は、財産、家庭の消費生活、生産、労働など、どの点まで共同で行っているかは別にしても、「完全共同体、いわば一の財布、一つ釜、無給で、しかも無差別平等の共同体」［村田 1999:55］を目指す。私的な所有を止揚することで、「人間的な感覚や特性を解放する」［真木 2003:213］ことに繋げようとするのである。そこで、共同体としては「来る者拒まず、去る者追わず」の姿勢

を有し、成員間では、すべてのものが平等に分配され、高い共有意識が形成される中で「兄弟姉妹」の関係性［村田 1999:88］が強調される。その究極的な形態は、心境部落における「差別を超える関係」(93)であり、「人間として『ともに生きる』関係」(94)である。これらの実態から見出されるのは、自己を見つめ、「人間としての生き方」(95)を探求する姿勢であり、他者を「寛容」(96)に受け入れようとする姿勢である。一燈園における「下坐」の思想や、フィンドホーンで重視される「調和」という考え方も、この「寛容」な姿勢に通じる概念である。そしてこれらの概念を基調とする生き方は、自然環境だけでなく、人間を取り巻く周囲のさまざまな環境に平和的に接し、協調関係の構築を目標とする「エコロジカル」［マーチャント 1994:181］な生き方と言い換えることができる。

そして、カウンターカルチャー的共同体では、すべての成員が平等に扱われる生活の中で、各々の成員が自己変革による「エコロジカル」な生き方の追求を求められる。同時に、成員がすべての人、あらゆる自然と「共に生きる」ことを志向することで、他者や自然環境との関係性の改革が進められる。そして、エゴイズムの超越や、他者や自然環境との共存という「個」の問題を「集団」的な規模で体現することによって共同体としての変革も並行して進められ、「共存的世界」［野本 1996:18］を創り出すことが目指されるのである。

つまり、カウンターカルチャー的共同体で醸成されるのは、どんな人に対しても尊重する気持ちを有し、個々人の人間的特性や、その背景にある文化を差異として捉える姿勢、いわば「心の開放」とも言えるライフスタイルである。この「心の開放」がなされている状態を維持するライフスタイルこそが、「エコロジカル」な生き方である。また、「エコロジカル」な生き方とは、自然環境を含む、個人を取り巻く周囲の全環境と「共に生きる」ことを指向するカウンターカルチャー的共同体の価値観に基づき、それらとの協調関係構築のための「関係革命」を目指すものである。同時に、この生き方がエゴイズムを克服し、あらゆる差別と抑圧の根源である人間の相互不信を解消しうる共同・共有生活空間を生み出し、他者や自然環境との「共生」を可能にするのである。つまり、「エコロジカル」な生き方の実践として表出するものが「関係革命」であり、その結果、創出されるのが「共生」である。そして、こうした「エコロジカル」な生き方を個人のレベルだけでなく、集団レベルで実現することがカウンターカルチャー的共同体生活に共通する生活目標であり、カウンターカルチャー的共同体文

化において重視される共通の価値観なのである。

第４章　カウンターカルチャー的共同体文化と現代社会

１．カウンターカルチャー的共同体が生きる社会

カウンターカルチャー的共同体は、既存の社会体制や社会において主流とされる価値観など、いわゆるメインカルチャーに対して対抗性を持つ共同体である。そこで共同生活を営むのは、メインカルチャーに問題意識を抱き、「ドロップアウト」した人々である。彼らが共有しているカウンターカルチャー的共同体の文化とは「エコロジカル」な生き方を追求するものであり、それは他者や自然環境との「共生」を志向しながら、個人、および共同体全体をより「エコロジカル」な存在に変革していこうとするものである。

では、カウンターカルチャー的共同体が問題意識を投げかけるメインカルチャーとはどのような状況にあるのだろうか。今日、世界ではグローバリゼーションが急速に拡大すると同時に、資本主義に基づく国際的な自由市場経済化が進んでいる。そうした現代社会を特色づける特徴は、いわゆる「『ゆたかな』社会、消費社会、管理社会、システム化社会、情報化社会」［見田 1996:10］などである。主に先進工業国における産業社会の発展により、物質的豊かさや快適で便利な生活が追求され、かなりの程度実現されてきた。人々は消費財に新たな価値を求め、消費社会を発展させた。これに伴い、生産効率の向上や消費財の均質化が求められ、管理化やシステム化が進んだ。その後、消費の多様化と個性化や、モノだけでなく「文化」の消費が活発化したのに加え、消費社会では情報技術の進歩とともに情報の消費が増大した。これらの消費社会の発達によって、消費者はさらに便利で快適な生活を送れるようになるとともに、社会的には自由主義的、競争促進的な側面が顕著になってきた［間々田 2005:3-4］。

他方で、現代社会は環境と公害問題、資源とエネルギーの問題、飢餓と貧困などの危機的な様相によっても特色付けられる。1980 年代以降の大量消費社会の高度化は、大量採取、大量生産、大量消費、大量廃棄という一連のサイクルを生み出した。このサイクルの過程で排出される産業廃棄物やガスによる自然環境や住環境の汚染、資源の採掘や伐採に伴う周辺環境の汚染、悪化、そして資源やエネルギーの有限性などが問題化している。さらに、先進国における資本主義的消費社会の発達による消費財需要の増大は、農作物や資源などの面で、発展途上国から先進工業国へ向かう搾取的な

輸出の促進に繋がっている。また発展途上国の原始的農村・山村社会にまで及ぶ資本主義貨幣経済の浸透は、「金銭を必要とする生活」［見田 1996:105］を一般化した。これにより、「貨幣が人びとと自然の果実や他者の仕事の成果とを媒介する唯一の方法となり、『所得』が人びとの豊かさと貧困、幸福と不幸の尺度として立ち現れる」［見田 1996:105］社会が構築された。これらがいわゆる「南の貧困」［見田 1996:105］を生み出し、飢餓や貧困の問題の一因となっているのである［見田 1996: ii ,74,77,92-95, 104-105］。

こうした社会情勢の中で、カウンターカルチャー的共同体は本来のカウンターカルチャー思想が持っていたメインカルチャーに対する対抗性を、現代社会に適応する形で緩和させながら性質的変化を遂げてきた。そしてさらに、共同体に内在する変革志向をもとに、現代社会に対して問題提起を行う姿勢を貫く共同体として存在しているのである。

2．カウンターカルチャー的共同体の隔絶性

現代社会においてカウンターカルチャー的共同体とメインカルチャー社会は共存している。だが、カウンターカルチャー的共同体にはメインカルチャーに対する問題意識が内在し、カウンターカルチャー的共同体とメインカルチャー社会との間に隔絶性が生み出されている事実は第２章および第３章で示した通りである。

では、カウンターカルチャー的共同体は「共生」を指向する「エコロジカル」な共同体でありながら、何故メインカルチャー社会とは一線を画した存在であり続けているのだろうか。ここでは、カウンターカルチャー的共同体とメインカルチャー社会との差異を取り上げ、カウンターカルチャー的共同体におけるメインカルチャー社会に対する問題意識の根底にある要因を提示することで、両者の間にある隔絶性の内実を明らかにしよう。

(1)競争社会と共生社会

はじめに挙げられる要素は、共同体生活の自己完結性である。第３章で述べた通り、カウンターカルチャー的共同体は各々が独自に生計を立てて共同体生活を営んでいる。新しき村のようにそれが自給自足によって運営されている場合もあれば、一燈園や紫陽花邑のように共同体内で企業を経営し、その利益によって共同体の資金を運営して

いる場合もあるが、個々のカウンターカルチャー的共同体は自己完結的な生計によって共同体生活を成立させているのである。

こうした性質は、元々のカウンターカルチャーが、産業化時代のメインカルチャー社会における「競争的・攻撃的精神であくせく働き、物質的な富を追求する個人主義のライフスタイルを否定」[今 1987:22] することから出発したことに由来するものであろう。カウンターカルチャー的共同体は、「競争社会」を否定し、「共生社会」としての共同体生活の実現を目指すとともに、共同体内における平和的共存を指向した。そうした社会の形成を可能にするのが新しき村における「兄弟姉妹」の関係や一燈園における「同人」の関係などの成員間の対等な関係性である。これらの関係性の根本にあるものは、「トゥギャザーネス」の観念である。つまり、カウンターカルチャー的共同体では共同体で生活する成員同士が、自分たちが同一種のメンバーであると共感すると同時に、共同体にある秩序を基盤にしながら、個々の成員が、人間同士および、すべての自然に対して深い関わりを感じるような関係を共有することが理想とされるのである [ライク 1973:264]。このような関係性はカウンターカルチャー的共同体における「エコロジカル」な生き方を象徴する具体的実践の形態である。そしてそれは山岸会における研鑽会（徹底した討論）のための関係や心境部落における「差別を超える関係」、フィンドホーンにおける「調和」の取れた関係などにも共通するものである。そこでは成員間に対等な人間関係を構築することによって平等意識が醸成されると同時に、相互に敬意を表して共存する姿勢が養われている。こうした環境で生活することによって成員同士の競争意識は解消され、「共生」が可能となるのである。

このような関係構築のために、カウンターカルチャー的共同体では、自己完結的な生計を立て、成員間での分配、あるいは必要に応じた譲与を行い、共同体内の平等性および共存関係を維持している。第 3 章で取り上げた事例の中でも、「弥栄」、山岸会、一燈園、紫陽花邑など、「一つ財布」を掲げた共同体運営を行う共同体が多数見受けられたのは、このためである。また極端な例とも言えるが、山岸会では生計を共にするだけでなく、「無所有」を基調としてあらゆる財産（衣服などをも含む）の共有をも実現させている。

カウンターカルチャー的共同体における共存の思想は、「万人のために十分な食べ物と住まいがあれば、すべての人間は相互に敵視しあうという仮定のもとに社会を考える必要はなくなる」[ライク 1973:402] という信念に基づいている。すなわち、他

者を敵視する機会を生み出す利益追求型の資本主義的競争社会を否定し、すべての人間が平和的に共存できる社会を構築することこそが、カウンターカルチャー的共同体の理想である。こうした理想社会を指向するユートピア性と、「一つ財布」による共同体内の生計管理を行う自給自足性によって、カウンターカルチャー的共同体は外部社会と一線を画した社会を形成している。つまり、ユートピア性と自給自足性によってカウンターカルチャー的共同体内部には思想の自己完結性と生活の自己完結性という二重の自己完結性が発生し、この二重の自己完結性によってユートピア性と自給自足性がさらに高められるという循環作用を生み出しているため、内外での隔絶性が生じ続けているのである。

(2)物質主義と精神性

メインカルチャー社会では、1950年代以降、近代化とともに消費社会化が進み、中産階級が増加した。この近代化に寄与したのは工業生産と官僚制であった。それらは、日常生活の管理を強めると同時に、個々人に物質的な豊かさを与えた［今 1987:61］。その後、消費社会の発展とともにメインカルチャー社会では、「文化」という非物質的な財の消費が盛んになったことも事実である。しかし、ここで消費される「文化」とは、学問、文学、絵画などの精神文化のみならず、料理、服飾、工芸品などの物質文化を含むものであった。さらに、それらの文化の消費が追求された理由は内在的な精神的発展のためというより、「見栄」の気持ちや、利潤の機会を得ようとする経済的動機が主なものであった。これらの文化はやがて値がつけられ、大衆消費文化として物的財化した。そしてこの文化消費のあり方は大衆文化産業という形態を取りながら、資本主義に基づくメインカルチャーの中で隆盛したのである［間々田 2005: 86-87,96-97］。

消費社会が成熟した現在では、そうした物質重視の傾向から脱却する脱物質主義が注目されている。こうした傾向に影響を与えているのは簡便性志向、高級・多様化指向、健康・安全志向、低価格志向、ゆとり消費志向、環境志向などの高まりである。この脱物質主義が顕著になるにつれて、消費全体の動向としては、消費者がモノよりもモノ以外の消費、あるいは消費以外の価値に関心を向ける傾向が次第に強まってきた。例えば、住宅に関しては、広さを求めるのではなく、量より質、すなわち構造の頑丈さ、間取りの工夫、使い勝手の改善、収納スペースの効率化、概観やインテリア

の美しさなどを追求する傾向である。また、食に関しては健康食品ブームやサプリメントの流行、スローフード意識の高まりなど、食生活の質と身体への影響を考慮する傾向である。こうしたモノ以外の消費や消費以外の価値への関心が高まる傾向に加えて、近年ではサービスや情報を「買う」機会が非常に多くなっている。以前は、モノとエネルギー消費の増大に特徴付けられていた消費社会が、今日では無形消費財や消費の裏にある価値に対する意識の高まりによって、その性質は変化しつつある［間々田 2005:150-154,172,177-181］。

このように、一連の消費文化の発達の中で物質的消費文化だけでなく非物質的消費文化も活発化してきたのであるが、労働者にとっては賃金と労働条件の向上により、経済的安定という形で進歩が達成された。つまり、賃金や労働条件の向上は労働者の物質的条件の進歩と言い換えることができ、あくまでも物質的価値に基づくものであった［ライク 1973:300］。また、能力本位主義と資本主義システムに基づく階層社会も地位、権威、賃金など物質的財貨を基準に形成されてきたのであり、ここにも物質主義的価値観が浮き彫りになっている。

このように、生活レベルに関してはモノ離れが進む近年のメインカルチャー社会であるが、今日まで基調となってきたのはモノに社会的な「力」が付与され、評価基準となる物質的消費文化であり、総じて物質的価値観を中心に据えた文化が形成されてきたのである。

これに対しカウンターカルチャーは、近代社会の産業化、高度資本主義化の流れの中で、物質主義や合理主義、それらに基づく近代的社会制度を批判することから発生してきた。ゆえに、カウンターカルチャー的共同体では物質的な豊かさを求める生活は避けられる。そうした生活に代わるものとして、「弥栄」では「仲間を慕い、生活も仕事も一緒にしながら、外部の社会とは異なるみんなが『人間』として付き合える」［弥栄之郷共同体 1989:22-23］社会を目指して共同体づくりが行われてきた。また山岸会は、夫婦間の和合、親子関係の良好なあり方など、人と人、あるいは人と鶏の関係を含む自然界の万物との一体化を実現する理想社会を指向する。心境部落においては精神薄弱者も健常者も同様の生活を送り、共同体を構成する一人一人がエゴイズムを克服し、すべての人を公平に思いやる「差別を超える関係」[97]の確立が目指された。このように、カウンターカルチャー的共同体において重視されるのは生活における物質的な豊かさではなく、「人間の広さや豊かさ」［野本 1996:252］である。「人間の広

さや豊かさ」とは、あらゆる経験に対して開放的かつ受容的な姿勢を持っていることや人間関係の豊かさを意味する［今 1987:151; ライク 1973:245］。したがって、カウンターカルチャー的共同体では、「他人との純粋な関係、友情、仲間意識、愛情、人間のコミュニティなどを、人生において最高に価値あるものとみなす」［ライク 1973:240］のである。

この他、カウンターカルチャー的共同体では、「人間意識を回復し、防衛し、発展させようとする努力」［ライク 1973:268］が重視される。ここで用いられる「人間意識」とは「人間の世界のあらゆる現象に対する自覚」［ライク 1973:266］のことであり、「努力」の目的は、自分自身とその生活、他者、自然に対して自覚を回復しようとすることに他ならない。野本は、人間を規定する判断基準は、それまでにその個人が取り交わした「関係」の総体であるとする［野本 1996:252］。それを踏まえると、カウンターカルチャー的共同体における自覚回復の「努力」とは、個々人が具体的な存在対象と向かい合い、その相手を受け入れようとする相互浸透の「関係」を積極的に成立させる行為である。そして、そうした「関係」を新たに構築する中で個々人が変質し、自分自身の「意識」の変革を成し遂げることで、生けとし生けるものへの愛、全体性への思いやり、協調、共感を持つ人間となる道を模索するのである［海野 1998:42;渡辺 1982:96］。これはすなわち「関係革命」を目指す思想である。カウンターカルチャー的共同体の成員は「一つ財布」の生活の中で私的な所有を止揚し、人間的な感覚や特性を解放することを目標とする。そして自然環境だけでなく人間を取り巻く周囲のさまざまな環境と協調関係を構築し、平和的共存を可能にする「関係革命」を実現しようとするのである。フィンドホーンにおける「調和」の取れた共同体への志向は自然環境や精霊をも含むあらゆる対象との関係性を改革しようとするものであり、「関係革命」の象徴とも言える思想であろう。このような思想に基づく生き方こそ、「エコロジカル」な生き方なのである。

以上のことが示しているように、カウンターカルチャー的共同体において重視されることは、精神性の追求である。そして、その基盤にあるものは非物質主義的な価値体系であり、精神性の追求に寄与しない物質的な豊かさはむしろ放棄される傾向にある。カウンターカルチャー的共同体においてモノの「無所有」が基調とされることが多いのは、物質的価値観から脱却し、人間存在としての内面の研鑽、すなわち精神性という非物質的な側面の豊かさを追求するためである。

このように、メインカルチャー社会では物質的な豊かさを「財」と捉える傾向があるのに対し、カウンターカルチャー的共同体では非物質的な精神性を「財」と捉えることが主眼とされてきた。近年ではメインカルチャー社会における脱物質主義化の傾向によって、物質主義的か否かという観点での両者の差異は縮小しているとも言える。しかし、非物質的価値観に関して、メインカルチャー社会では余暇的、趣味的ライフスタイルのレベルに留まっているのに対して、カウンターカルチャー的共同体では、山岸会における「研鑽」や一燈園における「路頭」が顕著な例であるように、日常的に内向追求意識を持つ生活が実践されている。したがって、こうした物質的価値観と精神性追求レベルのギャップが共同体の特殊性を強調し、カウンターカルチャー的共同体とメインカルチャー社会の隔絶性を生み出す1つの要因となっているのである。

(3)外部者の視点とドロップアウト

そして、メインカルチャー社会とカウンターカルチャー的共同体の相互の社会に関する認識の差も、隔絶性を生み出す要因の1つであろう。

カウンターカルチャー的共同体はメインカルチャー社会に対して問題意識を抱く、ドロップアウトした人々の集合体である。同時に、カウンターカルチャー的共同体はメインカルチャー社会に対して問題提起を行う性質を持つ共同体でもある。そして、カウンターカルチャー的共同体での生活の特性は、平和的共存を実現する社会の構築と、他者および自然との共生関係を育むことによる非物質的な豊かさの追求を指向することである。そこでは「ユートピア性」や「家族性」、「宗教性」などに基づく、成員相互の協同による「共生社会」が成立している。しかし、カウンターカルチャー的共同体はカウンターカルチャー的思想を共有する者だけの共同体であり、そこにはメインカルチャー社会とは異なる「秩序、統制、意味、目標」[村田 1999:85] が存在している。これらはすなわち共同体を維持するための規範である。例えば、山岸会における「ヤマギシズム」や一燈園の「懺悔奉仕」、心境部落における「尾崎哲学」などが、それである。「ヤマギシズム」は山岸会における「無所有一体生活」の理念および「研鑽」を伴う実践生活を規定するものである。また一燈園においては「懺悔奉仕」の姿勢が「行願」や「路頭」を基本とする生活の基盤となっている。あらゆる他者との共生思想を旨とする「尾崎哲学」は、健常者と精神薄弱者が「共に生きる共同体」である心境部落を支える規範の核である。このような共同体内に通底する規範が、成員の

求心性を高めるとともに、共同体内部における精神性の発達を促し、平和的な共存を成立させているのである。だが、こうした規範によって形成され、共有される共同体における思想は、あくまで共同体内に限定して適用されるものである。ゆえに山岸会における「娑婆」という概念に表れているように、カウンターカルチャー的共同体の思想は価値観の異なる共同体内部と外部社会とを区別して捉える内向性を備える。こうした思想体系はカウンターカルチャー的共同体を「心理的実験集団」[今 1987:103] 化するため、外部社会から見ればカウンターカルチャー的共同体における精神性の追求は宗教的で「不気味なもの」[今 1987:300] としても捉えられる。また、ニューエイジ運動が隆盛した 1980 年代後半以降、マインドコントロールによる成員支配を伴う「カルト教団」がメディアで取り上げられ、社会的なネガティブなイメージが形成された。メインカルチャー社会において「宗教的」と捉えられる共同体に関する社会認識は、そうしたネガティブなイメージと相まって、警戒すべき共同体運動という評価を増幅させる [今 1987:58; 弓山 2004:253-256]。したがって、そのようなメインカルチャー社会の人々がカウンターカルチャー的共同体に対して持つ「単純化・固定化・歪曲された観念やイメージ」[今津 1998:88] として形成される社会的なステレオタイプによって、共同体内外の摩擦が発生する。「山岸会事件」はそうした現象の先駆的な例であろう。こうしたメインカルチャー社会におけるカウンターカルチャー的共同体のイメージと実態の差異によっても隔絶性が生み出されているのである。

しかし、紫陽花邑における「寛容」な姿勢やフィンドホーンにおける「調和」に重点を置く思想が平和的共存を可能にする対人・対物関係を構築することを目指している通り、内実としてカウンターカルチャー的共同体の生活は、「心の開放」を実行し、「エコロジカル」な生き方を実践するものであり、共同体内外の枠組みを取り払った社会全体の「共生」を望むものなのである。したがって、このような共同体内外の認識の差異に着目すると、一定の社会における思想や価値観の共有が「共生社会」の実現に寄与する重要性が改めて確認できる。そしてこの思想や価値観の共有の拡大波及を表す現象が、「ドロップアウト」である。

ドロップアウトとはメインカルチャーからの逸脱行動であると同時に、メインカルチャーに対する反抗性を備え、新たな価値観を形成するための行動である。ドロップアウトする人々は「エコロジカル」な生き方の実践と、他者や自然との共存を目指す思想や価値観に共感することで、メインカルチャーからドロップアウトし、カウンタ

ーカルチャー的共同体へと「ドロップイン」する。そしてカウンターカルチャー的共同体とメインカルチャー社会との出入りは単に生活様式からの出入りだけでなく、思想および価値観からの出入りという二重の出入りを意味する。「弥栄」の創設当時の若者が「外部の社会とは異なる」[弥栄之郷共同体 1989:22-23] 社会の構築を目指し、新しき村に参加した知識青年たちが「周囲の因襲に満ちた」メインカルチャー社会との対比の中で、「いかに生きるべきか」という課題を村での生活の中で実践することを志向したように、カウンターカルチャー的共同体の活動を支えるのはドロップアウトによる生活および価値観の代替思想である。彼らはもともとメインカルチャー社会で生活し、カウンターカルチャー的共同体をメインカルチャーとは異なる思想と価値観を内包し、隔絶性を持つものとして捉えている。したがって、メインカルチャーにおける思想や価値観に対して問題意識を抱く人々が、それに変わる思想や価値観を志向して「アウトサイダー（局外者)」[ライク 1973:268] になることを求める際に目指す場所がカウンターカルチャー的共同体である。そしてその結果として生まれる行為を表象する現象が、ドロップアウトなのである。

このドロップアウトを誘発する媒体となるのは機関紙や書籍だろう。新しき村が機関紙『新しき村』を、山岸会が機関紙『けんさん』を発刊している他、「弥栄」は共同体の歴史を『俺たちの屋号は「キョードータイ」: 村に楽しい農業と暮しを一島根・弥栄之郷共同体の 17 年』[弥栄之郷共同体 1989] に記し、その思想と生活様式を紹介している。また本稿で事例として取り上げたカウンターカルチャー的共同体はすべてホームページを開設し、インターネットによる情報発信も行っている。こうしたメインカルチャー社会への情報発信が促進するドロップアウト、ドロップインによってカウンターカルチャー的共同体に新たな成員が加わり、成員の構成が変化する。これにより「既成のものを疑い、新しいものを模索しよう」[渡辺 1982:90] とするカウンターカルチャー的思想は更新される。例えば、紫陽花邑がその生業を自給自足的農業から社会福祉を中心とする事業へと移行したことや、フィンドホーンにおける「エコビレッジ計画」の開始などがその例であり、これらは社会的なニーズと共同体内における成員の生活状況に即した変化である。こうしてカウンターカルチャー的思想は常にメインカルチャー社会を懐疑的に捉え、省みるべき思想や価値観を探るカウンターカルチャー的思想としての対抗性を維持しているのである。このように、メインカルチャー社会とカウンターカルチャー的共同体の間にある隔絶性を認識して、ドロップアウ

トする人々によってカウンターカルチャー的思想が維持され、メインカルチャー社会とカウンターカルチャー的共同体とを隔てる思想や価値観の「壁」が再生産される現象は、隔絶性による隔絶性の再生産と言える。

以上の事実より、カウンターカルチャー的共同体とメインカルチャー社会の間に隔絶性を生み出す具体的な要素は、カウンターカルチャー的共同体における、「競争」ではなく「共生」を指向する思想、非物質的な豊かさを重視する思想、そしてカウンターカルチャー的共同体の存在自体に関する肯定的認識の有無という3つの特徴である。これらの特徴はそれぞれ、理想の社会像、追求する生活のあり方、それらの実践である生き方の指向の差異を示すものであり、総じて価値観の相違に依拠する。そしてカウンターカルチャー的共同体で追求される価値観は、他者や自然環境との単なる共存を意味するものではなく、それらの対象を尊重する姿勢を備え、それらとの間に相互に作用し合う関係を構築することによる積極的な相互浸透を伴う「共生」を指向する価値観である。したがって、カウンターカルチャー的共同体とメインカルチャー社会との隔絶性の根本にある要因は生きることそのものに関する価値観の差異であり、そうした価値観の差異を保持するために隔絶性を備えているとも言える。他方でカウンターカルチャー的共同体はメインカルチャー社会に対して価値観の差異を主張するために積極的な情報発信を行うと同時に、外部からの出入りが自由な状態を保ち、メインカルチャーとの間に開放性を維持している。このように、カウンターカルチャー的共同体は思想的にはサブカルチャーとしてメインカルチャーに内在し、メインカルチャー社会と並存しながら、メインカルチャー社会との間に隔絶性を備え、一線を画してその価値観を客観的に観察することで、現代社会に対して問題提起を行いうる性質を核として存在している。そうしてカウンターカルチャー的思想に基づく理想の生き方をメインカルチャー社会に対して提示しようとするのである。

3．カウンターカルチャー的共同体における「エコロジカル」な生き方と現代社会

(1)生きることと自然世界

カウンターカルチャー的共同体における理想は、「エコロジカル」な生き方である。「エコロジカル」な生き方は人間と自然環境の相互依存を前提としており、その上に成り立つ人間と自然の双方向の作用によって調和のとれた共同体生活を構築しようとするものである。つまり、自然環境をありのままに維持し、自然を資源として受動的

に利用しながら生活するのではなく、「自然に手を加える」[渡部 1995:215] ことで能動的に「自然の恵みを享受しながら多様性をさらに拡大」[渡部 1995:216] させ、自然環境が持つ潜在的可能性を活かしながら人間と自然の相互作用を考慮して生活するのである。したがって、カウンターカルチャー的共同体での生活は資源やエネルギーの消費を抑制すると同時に、人間が積極的に自然に働きかけることを促進する「エコロジカル」なものであり、これは人間と自然環境との持続的な共存を可能にする。

新しき村は、「自分も生き、他人も生き、全部も生きる世界」の構築を指向して、人間と生態系とが共存する自給自足的共同体を築いてきた。またフィンドホーンにおいては精霊との協同を伴う有機農業やパーマカルチャー運動の他、地球および世界レベルでの生態系との共存関係の維持を目標とする理念の下、「エコビレッジ計画」によるエネルギー効率の向上と徹底したリサイクルが検討されている。このように、カウンターカルチャー的共同体の生活は「エコロジカル」な価値観を強調するものである。この「エコロジカル」な価値観とは、「人間中心の倫理」[マーチャント 1994:95] から脱却した「生態系中心の倫理」[マーチャント 1994:101] に基づく。すなわち、この価値体系は人間と自然環境の関係性について、人間が自然環境を支配、操作する存在ではなく、人間が自然環境の中で「自然に依存して生きる」[マーチャント 1994:184] 存在であると規定する。したがって、カウンターカルチャー的思想に基づく生活において、自然環境は敬意を持って接するべき対象であり、相互の共存のために人間は自然環境に配慮しながら生活することが不可欠とされるのである。

現在、カウンターカルチャー的思想による運動の中で、「エコロジカル」な生き方を顕著に体現し、自然環境との共存を訴えている活動はエコロジー運動である。この運動は自然環境に悪影響を与えない生き方を指向すると同時に、自然環境を含む生態系全体の中で人間と人間以外の生物、非生物が共存できる社会への変革を目指す運動である。

自然環境に対する意識の高まりを示す例を挙げると、環境問題に関する世界的な動きとして、2002 年にヨハネスブルグで開催された国連地球サミットが挙げられる。そこでは、1992 年のリオデジャネイロにおける同サミットで採択された「持続可能な開発」[98]を実現するための「アジェンダ 21」における行動計画を評価するとともに、各国首脳、政府代表の他、NGO や財界および市民社会団体の指導者など数万人の参加者によって「持続可能な開発」を達成するための話し合いが行われた[99]。また 2005 年

には地球温暖化防止を目的とする「京都議定書」が発効した。これは、世界152カ国および欧州共同体が締結しているものであり、先進国等に対し、温室効果ガスを1990年比で、2008年から2012年にかけて一定数値（日本6%、米7%、EU8%）を削減することを義務づけている(100)。このように、近年、環境問題やエネルギー問題の顕在化により、国際的な環境意識の高まりが社会現象化している。核による汚染や、酸性雨、地球温暖化、あるいは化石燃料や天然資源の枯渇など、さまざまな問題が広い領域で討議されている。加えて、消費活動においてはできるだけ自然な食品を選ぶことを意識し、身体、環境にやさしい商品を選択する消費者であるグリーン・コンシューマーが1つの勢力となった[海野 1998:135]。

こうした自然の生態系に関する今日的問題の背景には、常に大量生産や大量消費を促進する産業社会および消費社会がある。高度資本主義化の流れの中で物質主義、競争主義、合理主義に基づく産業社会化、消費社会化が加速した。これらの社会的変化は生産活動とそれに伴う廃棄物、排出物の量を拡張するとともに、エネルギー資源を濫費し、生態系を汚染・破壊してきた［海野 1998:163］。

こうした事態に対して、カウンターカルチャー的思想を持つ人々は、「エコロジカル」な価値観の重要性を主張してきた。その実践とはグリーン・コンシューマーになることであり、リサイクル志向に転化することであり、または自給自足の生活を目指すことである。そしてこれらの自然環境とバランスよく共存する生活や社会の構築を目指す人々の人口が拡大すると共に、彼らの活動はエコロジー運動という潮流的運動となって社会に表出されてきた。このエコロジー運動家の具現的集合体であり、今日的な主役でもあるのがエコロジー指向型カウンターカルチャー的共同体のエコ・ビレッジである。ここで実践される「エコロジカル」な生き方は単なる環境保護主義的な生活ではなく、周囲の人間、自然環境、その他さまざまなものとの間に調和的な関係を構築し、平和的共存は図ることで「共生」を目指すものである。

こうした生活は現代社会において求められている社会の「持続可能な開発」に関する1つの解決策を示すものである。最近では、「ロハス」(101)というライフスタイルの流行が見られるように、個人レベルの生活における自然環境との持続可能な共存を目指す生き方、すなわち、人間の生活と自然環境への作用との関係性を見直す動きが具現化している。カウンターカルチャー的思想がメインカルチャー社会に提示してきた生き方が、現代社会において再考されつつあるのである。カウンターカルチャー的共

同体における「エコロジカル」な生き方は、個人生活レベルの枠を乗り越えて社会全体として生態系に働きかけ、人間と自然環境との相互作用によって持続可能性を増幅させようとするものである。フィンドホーンでは体験習慣プログラムを利用することで、この「エコロジカル」な生き方を一時的に体験することが可能である。この体験習慣プログラムの経験者はフィンドホーンにおける「エコロジカル」な生き方を内在化させるだけでなく、メインカルチャー社会に戻った後、ダンスや歌を通してフィンドホーンにおける生活の一部を体験できる場を提供する交流会を開催したり、フィンドホーンでの価値観や「エコロジカル」な生き方を紹介するワークショップを催すなど、共同体外部において「エコロジカル」な生き方の重要性を発信している［寺山1998:100-101,113-117］。こうしたフィンドホーンの活動とその社会的影響は単体の運動ではない。エコ・ビレッジはグローバル・エコビレッジ・ネットワークを組織し、世界的にエコ・ビレッジ活動を推進している。したがって、これまでカウンターカルチャー的共同体が主張してきた「エコロジカル」な生き方の重要性が見直されつつある現代社会において、国際的な組織的運動として、今後さらに「エコロジカル」な生き方、そしてその価値観を見直す潮流を推進する存在となることが可能であろう。カウンターカルチャー的共同体は「エコロジカル」な生き方を目指す人々を受容し、またそうした人々を社会に送り出す媒体であるとともに、現代社会における人間と生態系との持続的な共存を目指す社会的風潮を後押しする運動体となりうるのである。

人間は地球という1つの生態系の中で生きる以上、自然環境と共存していかなければならない。また共存する上ではそこにある自然環境を受容し、互いに持続的な成長を遂げられるよう配慮することが不可欠である。「エコロジカル」な生き方においては、自然環境を悪化させる可能性のある物質財の消費や短絡的欲求による過度の消費は回避される。そしてそこに暮らす人々は自然環境を尊重するだけでなく、生態系の状況に対する配慮、すなわち生態系との対話を意識するようになる。したがって、「エコロジカル」な生き方は現代社会が抱える環境問題や資源およびエネルギーの枯渇問題の改善、解消に寄与しうる。カウンターカルチャー的共同体は、この「エコロジカル」な生き方を追求する人々の基盤となり、今日社会においてそうした生き方の思想や価値観を発信、伝播する主体として重要な役割を果たす可能性を内包しているのである。

(2)他者との共生意識

「エコロジカル」な生き方の重要性は、人と人との関係においても当てはまる。第３章においてカウンターカルチャー的共同体の文化が、エゴイズムの克服や、他者や自然環境との共存を集団レベルで実現し、個人間だけの関係を超越した社会的な「共生」を目標とするものであることを明らかにした。このことが示すように、「生態系中心の倫理」に基づく「エコロジカル」な生き方とは自然環境だけでなく、個人を取り巻くあらゆる環境との複合的な「共生」を指向するものである。そうした文化を備える共同体生活において活動の主体となるのはやはり人間であり、人間同士の関係においてどの程度、「共生」が実現しているかが重要な観点である。だが、ここで留意しなければならないのは、カウンターカルチャー的共同体とメインカルチャー社会との間に存在する隔絶性である。したがってカウンターカルチャー的共同体の内部には思想面と生活面における二重の自己完結性を内包することに伴う独自の価値枠組みが存在することを前提として、カウンターカルチャー的共同体における人間同士の関係性を論じよう。

「エコロジカル」な生き方において求められる姿勢に着目すると、それは個人が持つ人間的特性や生活背景、すなわちその人間個人が形成してきた人としての「文化」の違いを「尊重すべき差異」として捉える姿勢である。例えば、心境部落では健常者と精神薄弱者が、労働の場に関しても風呂や食事に関してもすべて同じ様式による日常生活を送り、そこでは生活能力や労働能力の高低は人間としての評価には結びつかない。また紫陽花邑は元々出自が異なる人々が集っただけでなく、家族の有無や前科の有無など、さまざまな背景を持つ人間の集合体である。さらにそれは宗教型のカウンターカルチャー的共同体でありながら、邑の住人の中には「大倭教」に興味も持たない者もおり、信仰に関して自由な社会が形成されているのである。このようにカウンターカルチャー的共同体における生活の中では個人の「文化」の差異は排斥されることなく、それぞれの成員を特徴づける差異として尊重されるのである。ここでは、自らが持つ価値観を絶対的に肯定することを回避した上で、他者が持つ価値観を理解し、尊重する姿勢の醸成が基調となっている。ゆえにカウンターカルチャー的共同体内部における人間関係は自己の価値観に固執することなく、他者の価値観を寛容に解釈することによる相互の差異の認識の上に成り立っているのである。この肯定的な差異の認識は、人間の関係性における両者の間に一定の結着点を見出すための対話を生

み出す。これにより両者は相互に理解の矛盾がない整合の取れた関係を構築し、異なる個人の「文化」同士の共存が可能になる。そしてカウンターカルチャー的共同体内ではそうした共存関係が組織的に形成され、その総体として「共生社会」が成立しているのである。

また、こうした「異文化」間の対話の促進と共生社会の構築に寄与するもう1つの要素として、カウンターカルチャー的共同体においては非物質的な豊かさが重視されることが挙げられる。前節で述べたようにカウンターカルチャー的共同体では物質主義的な価値体系から脱却し、精神性などの非物質的な「財」の豊かさが追求される。ゆえに成員は総じて金銭や物質所有に対する私欲が希薄である。したがってカウンターカルチャー的共同体では有形可視な物質主義的価値観を旨とする資本主義的価値観に基づく競争主義は否定されると同時に、地位、権威、賃金など物質的財貨の多少を基準とする資本主義的格付けは回避されるため、個々人の関係は精神性を含む人間個体とその「文化」に基づいて構築される。こうした点も人間相互の対話による価値観の差異の尊重と共存関係創出を助長する要素である。すなわちカウンターカルチャー的共同体は、「関係革命」を指向する「エコロジカル」な生き方によって成員同士の間に協調関係を構築することで、一方では山岸会の研鑽会に見られるような対等な立場での積極的な意見交換を可能にする関係を創出するとともに、他方では心境部落における「差別を超える関係」のように相互の差異を尊重し、配慮し合う平和的共存関係を創出している。そして共同体生活において成員の相互浸透と相互尊重を伴う「共生」を実現しているのである。

カウンターカルチャー的共同体文化は以上のような「共生」を指向する価値観や姿勢によって構成されている。そして共同体生活を通して成員がそれらを内在化させ、個々の人間として「関係革命」を達成し「エコロジカル」な生き方を追求するようになる。ここでは競争は回避され、非物質的な豊かさを求め、生きることに関して突き詰めて考える生き方が指向されるのであり、こうした生き方の実現に際してカウンターカルチャー的共同体は成員の価値観や姿勢の養成を行う教育機関的な役割を果たしている。カウンターカルチャー的共同体での生活は、「エコロジカル」な生き方の基盤となる「共生」を指向する価値観や姿勢の発信運動としての側面を持つとともに、人間と人間との対話を通じて人間関係を育む教育活動的な側面も持つものなのである。

カウンターカルチャー的共同体における思想や価値観はあくまでメインカルチャ

ーに対抗性を持つものであり、そこに存在する文化はメインカルチャーに内在する。他方で、カウンターカルチャー的共同体自体とメインカルチャー社会との間には価値観の相違によって隔絶性が生ずることは避けられない事実である。しかし、そうした独特の特徴を内包するものではあるものの、カウンターカルチャー的共同体における生活が提示する「エコロジカル」な生き方や「共生」に関する志向は、現代社会において他者や自然環境との関係性を再考、再構築する上で必要となる性質を備えている。まずこれらの指向の基礎実践である「関係革命」によって対象存在との間の協調関係の構築することは、今日、人類が自然環境と付き合う上で求められる、環境に配慮した消費活動あるいは生き方そのものの基本となる。カウンターカルチャー的共同体における生活は「関係革命」を志向する個々人の意識を醸成することによって、自然環境を尊重するだけでなく、生態系全体に対する配慮に基づく人間と生態系との持続的な共存に寄与しうるのである。また人間同士の関係においても、カウンターカルチャー的共同体における「エコロジカル」な生き方や「共生」のあり方に関する志向は、個々人の「文化」の違いを「尊重すべき差異」として捉える姿勢を醸成するとともに、成員間に協調を基本とする平和的共存関係を構築することで「異文化」間の対話の促進と共生社会の構築に寄与する。これは競争や物質的豊かさの追求を基調とする現代社会における人間関係に関する内省の機会を与え、人と人との結びつきを強化、改善しうるものである。加えて、カウンターカルチャー的共同体はこれらの志向に基づく人間形成を行う教育的機関機能を備える社会であると同時に、「エコロジカル」な生き方や「共生」に関する志向を発信する主体となり、カウンターカルチャー的思想の継続・拡大を支持、支援するのである。

第5章　結論

現代社会は資本主義に基づく合理主義的な自由市場経済が主流を成す社会であり、「消費社会」、「競争社会」と言い換えることもできる。こうした社会の根幹には物質主義的価値観や競争原理があり、これらを基調として「メインカルチャー」が形成される。メインカルチャーは現代社会における支配的文化である一方で、産業社会の成長に伴う環境問題や南北問題などの諸問題を抱えている。また第2次世界大戦の終結以来、国際的な「平和」創造への取り組みが進められてきたものの国家間、宗教間、民族間の争いは現在も発生し続けており、依然として世界各地でテロや紛争は跡を絶たない。

カウンターカルチャーおよびカウンターカルチャー的共同体はそうしたメインカルチャー社会に包含されながらも、メインカルチャーへの対抗性を示し、現代社会に対して問題提起を行うことを志向する。カウンターカルチャー的共同体における思想は物質主義的、競争主義的価値観から脱却し、個々人が他者や自然環境との調和のとれた共存関係を構築することを指向するものである。そして集団レベルで「エコロジカル」な生き方を追求し、その実践である「関係革命」を通して「共生社会」の実現を目指す文化がカウンターカルチャー的共同体に内在する共生文化である。

カウンターカルチャー的共同体はメインカルチャーの社会構造の中で活動し、メインカルチャー社会から独立して存在しうるものではない。だが、それはあくまでメインカルチャーに対抗する思想を持つ共同体であり、カウンターカルチャー的共同体はメインカルチャー社会との間に隔絶性を維持している。この隔絶性は共同体自体の自己完結性、物質に関する価値観の差異、そしてメインカルチャー社会とカウンターカルチャー的共同体の相互の社会認識と実態の格差によって生み出されるものである。そうした隔絶性を維持しながらも、カウンターカルチャー的共同体はメインカルチャー社会に対して「政治性」を持って働きかけを行っている。

こうしたカウンターカルチャー的共同体の機能に着目すると、それは一種の社会的装置と捉えることができる。カウンターカルチャー的共同体は文化的に出入りが自由な社会的空間である。そこにメインカルチャーの価値観から「ドロップアウト」してきた人々が参入すると、彼らはカウンターカルチャー的共同体におけるカウンターカ

ルチャー的思想に基づく価値観を学び、少なからずその影響を受けることになる。さらにその上でカウンターカルチャー的共同体の生活を離れ、メインカルチャー社会に復帰する者はカウンターカルチャー的思想に基づく価値観をメインカルチャー社会の中に還元しながら生活することになる。筆者がイランで出会った日本人バックパッカーはその一例である。彼は自らが体験したカウンターカルチャー的共同体での生活の内容を語るとともに、筆者を含むバックパッカー数人に対してそこで共有されていた価値観を説くことで、カウンターカルチャー的思想に基づく価値観を「伝播」したのである。このようにカウンターカルチャー的共同体は、そこを通過することで新たな価値観を持つ人間を醸成し、その価値観をメインカルチャー社会に還元する社会的装置機能を持つ。

この装置に関係する主体は内部者、外部者、そして還元者の3者である。内部者とはカウンターカルチャー的共同体で生活する成員であり、外部者とはメインカルチャー社会で生活する人々である。そしてここで用いる還元者とはドロップアウトによってカウンターカルチャー的共同体生活を体験し、再びメインカルチャー社会に復帰する人々を指すものとする。その上で還元者の役割を考察すると、彼らはまずカウンターカルチャー的共同体での生活を通して「エコロジカル」な生き方等のカウンターカルチャー的思想を内在化させる。この時点では言わば「インプットの主体」である。そしてメインカルチャー社会に復帰すると同時に異文化間の対話の促進や共存関係の構築による「共生社会」を指向する価値観を社会に還元する主体となる。すなわち「インプットの主体」から価値観運搬機能を持つ「アウトプットの主体」へと移行するのである。こうした一連の流れの中で還元者は、カウンターカルチャー的共同体における「共生」を指向する価値観を獲得する。そして共同体内部での他者や自然環境との向き合い方、付き合い方、すなわち生態系との関係性に関する姿勢（意識や態度）を再考し、平和的に共存しながら相互の非物質的な豊かさを高め合う関係の構築を目指すとともに、そうした関係の重要性を発信する存在になるのである。

このような、「エコロジカル」な生き方を実践するカウンターカルチャー的共同体は、それ自体がさまざまな他者との接触の場であり、人間性教育の場であり、またライフスタイル創造の場である。しかし、視野を広げてその社会的な役割を見ると、カウンターカルチャー的共同体はメインカルチャー的視点とカウンターカルチャー的視点双方の見方を内在化し、現代社会で重視すべき価値観について複合的に考察するこ

とを可能にする社会的装置としての機能も持ち合わせているのである。さらにこの機能は還元者という媒体を通じてカウンターカルチャー的価値観とメインカルチャー的価値観との接触を促進する支持母体でもある。

こうした社会的装置としての機能を持つカウンターカルチャー的共同体が追求する「エコロジカル」な生き方の今日的意義として、本稿では2つの点を取り上げた。まず1つ目は、人間と自然環境との関係性に関する意義である。「エコロジカル」な生き方は人間と自然との相互関係に働きかける作用を促し、現代社会が抱える環境問題の解決策を示すとともに、持続可能な「共生」の実現に寄与するという。2 点目は、異「文化」間対話の促進と「共生」に関する意義である。カウンターカルチャー的共同体では個々の成員が形成してきた「文化」を「尊重すべき差異」として捉える姿勢が養われる。こうした姿勢の上に成り立つ「エコロジカル」な生き方は他者との間に対話を生み出し、それぞれの「文化」の共存関係構築に寄与する。

このように、カウンターカルチャー的共同体における「エコロジカル」な生き方の醸成が今日的意義を持つ事実は、カウンターカルチャー的共同体が内包する社会的な役割を明らかにする。つまりカウンターカルチャー的共同体はメインカルチャー社会に対してカウンターカルチャー的思想を発信する主体であると同時に、その独自の価値枠組みの中で、「エコロジカル」な生き方に象徴されるような現代社会において省みられるべき価値観や姿勢を育成する教育機関ともなっているのである。そしてその共同生活の根底にあるのは「共生」を指向する価値観である。ここで用いる「共生」とは個人のエゴイズムを抑制し、周囲の環境に配慮する生き方であり、それは相互の差異を尊重しながら受容することを促し、なおかつ対等な関係性と相互干渉的な関係性を構築する働きを持つ。つまり、カウンターカルチャー的共同体における「共生」は、私欲を重視し、相互に非干渉的な関係性の中での「表面的な共生」とも言える生き方とは異なり、多様な文化の尊重と理解を促し、相互に認め合い、尊重し合う共同生活を指す。こうした「共生」の実践は、現代社会が抱える異文化間対話の促進と多様性の共存という課題の克服を可能にしうる性質を持つものであり、その「共生」指向は現代社会において求められる生き方（社会的生活に取り組む姿勢）を考える上で重要なものであると言える。このように、カウンターカルチャー的共同体はメインカルチャー社会とは一線を画しながら、メインカルチャーにおいて省みられるべき「共生」を指向する価値観を醸成する存在として、現代社会における個々の人間の生き方に影

響を与えうるものである。そしてそこで目指される「共生」のあり方とは、今日的な社会問題の根本にある競争主義や物質主義に根差すエゴイズムの意識を取り除き、「エコロジカル」な生き方を実践することの重要性を提示するものなのである。

注

(1) コラス・レイ『理由なき反抗』(1955年、ワーナーブラザーズ、アメリカ)やラズロ・ベネデク『乱暴者』(1953年、コロムビア、アメリカ)など。

(2) 1950年代中頃から先進資本主義諸国で形成された社会主義運動の潮流の一派であるが、正統派マルクス主義とは異なり、資本主義における経済的搾取よりも政治的、哲学的疎外を重視したものだった。また、社会変革における労働者階級の特権的な役割を相対化し、経済の客観的な動向よりも、意識変革の重要性を説いた[宮原 1990:103]。

(3) 本来、フランス、イタリア、スイス、ベルギーなどの「自治体」の最小区分を指し、親密な結合関係を持つ共同体、共同自治体の総称とされる。同時に、そこに共に参加し、共に所有することを通して、親しく交わるという意味が包含されている[村田 1999:50]。

(4) HOTWIRED JAPAN ホームページ
(http://hotwired.goo.ne.jp/news/culture/story/20020424205.html[2006/11/06 参照])より。

(5) アサヒグラフ 1979年『にっぽんコミューン』p157 朝日新聞社より。

(6) 新しき村ホームページ(http://www.atarashiki-mura.or.jp/[2006/11/26 参照])より。

(7) アサヒグラフ 1979年『にっぽんコミューン』p173 朝日新聞社より。

(8) アサヒグラフ 1979年『にっぽんコミューン』p175 朝日新聞社より。

(9) 俗世間の掟に従わず、放縦な生活をする人を指す。

(10) 1945年から1973年までの間、新宿に存在した喫茶店である。1960年代、カウンターカルチャーの殿堂『フーゲツ』として、世界中のバックパッカーにその名を知られた。はてなダイアリーホームページ
(http://d.hatena.ne.jp/keyword/%c9%f7%b7%ee%c6%b2?kid=39206[2006/11/26 参照])より。

(11) 三省堂ぶっくれっとホームページ
(http://www.sanseido-publ.co.jp/booklet/cult_saiko.html[2006/11/06 参照])より。

(12) 山田史郎ホームページ

(http://www1.doshisha.ac.jp/~syamada/work/column/c6.htm[2006/11/06 参照])より。

(13) 山田史郎ホームページ

(http://www1.doshisha.ac.jp/~syamada/work/column/c6.htm[2006/11/06 参照])より。

(14) 片山邦夫の「紆余曲折」ホームページ

(http://www.pawanasuta.com/mailmagazine/backnumber2.html ［2006/12/08 参照］)より。

(15) 「ユートピア研究」ホームページ(http://www.geocities.com/genitolat/Utopia/034.html ［2006/12/08 参照］)より。

(16) フィンドホーンホームページ

(http://www.findhorn.org/events/exspirit/foreign/japanese_new.php[2006/12/08 参照])より。

(17) 一燈園ホームページ(http://www.ittoen.or.jp/index2.htm ［2006/12/08 参照］)より。

(18) ひらめきや直感のような、肉体の五感以外の方法で感知したものを言語化したり、視覚化したりすることによって、目に見えない存在や遠く離れた存在、あるいは内なる存在とコミュニケーションすること。チャネリングステーションホームページ(http://www.channeling.jp/guide/faq/before.shtml ［2007/01/11 参照］)より。

(19) 石を使った代替医療行為で、インドのヨガ療法の理論を用いて、それぞれのチャクラに対応する石を置き、人体のエネルギーやオーラを活性化することによって、体調を良くしたり、精神を整え、鍛えたりする健康法。きのままホームページ(http://www.kinomama.jp/lohas/yogo/2006/01/post_2259.html[2007/01/11 参照])より。

(20) 人間を「体・心・気・霊性」等の有機的統合体ととらえ、社会・自然・宇宙との調和に基づく包括的、全体的な健康観に立脚し、中国医学やインド医学など各国の伝統医学、心理療法、自然療法、栄養療法、手技療法、運動療法などを取り入れながら、自然治癒力の増強を治療の基本とする医学。NPO 法人日本ホリスティック医学協会ホームページ(http://www.holistic-medicine.or.jp/intro.htm ［2007/01/11 参照］)より。

(21) 個に留まらず、自他の境界を超え、あらゆるものが繋がっているという視点や意識に着目し、「個を超える」ないしは「個の境界を横断する」ことを意味する用語で、自己やアイデンティティの感覚が、個人的なものを超え、人類、生命、魂、宇宙のより広い諸側面を含むものへと拡がる体験と個人的な体験との双方の重要性を認め、より広い文脈の中に位置づける思想を指す。日本トランスパーソナ

ル学会ホームページ (http://home.teleport.com/~jiroi/main/jta/contents.html［2007/01/11 参照］)より。

(22) 人間も生態系の一要素であるという視点から、自然環境とバランスよく共存する生活や社会を築くことを目標とする活動。反原発、安全食品の普及、廃品リサイクルなどの活動もこの運動に包括される。環境 goo ホームページ (http://eco.goo.ne.jp/word/ecoword/E00090.html［2007/01/11 参照］)より。

(23) 20 世紀初頭から始まった現代物理学の革新、第 2 次世界大戦の前後に生物学やコンピュータ科学から生まれてきたシステム理論の登場、1960 年代後半に顕在化した意識科学の模索の 3 つを源流にし、さまざまな領域の成果を貪欲に取り入れてきた科学分野。これは西欧科学を支配してきた機械論的世界観とその手法である要素還元主義に対して包括論的理論を提唱し、現代物理学と東洋思想の相似性を強調するとともに西欧の科学界では意識的には取り上げられることのなかった神秘主義的アプローチを科学探求の根底に据えている［甲斐／北川 1987:134-135］。

(24) BIOcity ホームページ (http://www.biocity.co.jp/04-c_no.25/no.25-003ecovile.htm［2006/12/09 参照］)より。

(25) グローバル・エコビレッジ・ネットワークホームページ (http://ecovillage-japan.net/gen/about/wiaev.html［2006/11/06 参照］)より。

(26) BIOcity ホームページ (http://www.biocity.co.jp/04-c_no.25/no.25-003ecovile.htm［2006/12/09 参照］)より。

(27) BIOcity ホームページ (http://www.biocity.co.jp/04-c_no.25/no.25-003ecovile.htm［2006/12/09 参照］)より。

(28) グローバル・エコビレッジ・ネットワークホームページ (http://ecovillage-japan.net/gen/about/index.html［2006/12/17 参照］)より。

(29) 高度管理社会の「意識支配」で衰弱した意識を再活性化する「意識拡大」を体験した個人が、相互に共同体を形成することである［Martin and Bruce 1992:396］。

(30) 山田史郎ホームページ (http://www1.doshisha.ac.jp/~syamada/work/column/c6.htm［2006/12/11 参照］)より。

(31) 山田史郎ホームページ (http://www1.doshisha.ac.jp/~syamada/work/column/c6.htm［2006/12/11 参照］)より。

(32) 山田史郎ホームページ

(http://www1.doshisha.ac.jp/~syamada/work/column/c6.htm［2006/12/11 参照］)より。

(33) 次節における弥栄之郷共同体、新しき村、山岸会、一燈園、紫陽花邑、心境部落の事例に関する基礎的データはアサヒグラフ 1979 年『にっぽんコミューン』pp87-102, 133-168, 169-184, 201-236 に依拠する。

(34) アサヒグラフ 1979 年『にっぽんコミューン』p90 朝日新聞社より。

(35) アサヒグラフ 1979 年『にっぽんコミューン』p90 朝日新聞社より。

(36) アサヒグラフ 1979 年『にっぽんコミューン』p91 朝日新聞社より。

(37) アサヒグラフ 1979 年『にっぽんコミューン』p91 朝日新聞社より。

(38) アサヒグラフ 1979 年『にっぽんコミューン』p101 朝日新聞社より。

(39) やさか共同農場ホームページ(http://fish.miracle.ne.jp/sennin-g/yasaka/com.htm［2006/12/16 参照］)より。

(40) ふるさと弥栄ネットワークホームページ(http://www.iwami.or.jp/furusato/［2006/12/16 参照］)より。

(41) アサヒグラフ 1979 年『にっぽんコミューン』p97 朝日新聞社より。

(42) アサヒグラフ 1979 年『にっぽんコミューン』p92 朝日新聞社より。

(43) アサヒグラフ 1979 年『にっぽんコミューン』p100 朝日新聞社より。

(44) アサヒグラフ 1979 年『にっぽんコミューン』p102 朝日新聞社より。

(45) 新しき村ホームページ(http://www5a.biglobe.ne.jp/~atarasi/［2006/12/13 参照］)より。

(46) アサヒグラフ 1979 年『にっぽんコミューン』p158 朝日新聞社より。

(47) アサヒグラフ 1979 年『にっぽんコミューン』p153-162 朝日新聞社より。

(48) 日比野英次「新しき村の実現について」ホームページ(http://www5a.biglobe.ne.jp/~atarasi/［2006/11/09 参照］)より。

(49) 村にて義務労働を果たし、協力して生活しながら新しき村の精神の実現に直接寄与する者を指す。新しき村ホームページ(http://www5a.biglobe.ne.jp/~atarasi/［2006/12/13 参照］)より。

(50) 村の事情や当人の事情で村内生活者になれない者が、村外で個々の生活を維持しながら、自分の意志と力に応じて新しき村の建設に協力する者。新しき村ホームページ(http://www5a.biglobe.ne.jp/~atarasi/［2006/12/13 参照］)より。

(51) 新しき村ホームページ(http://www5a.biglobe.ne.jp/~atarasi/［2006/12/13 参照］)よ

り。

(52) 新しき村ホームページ(http://www5a.biglobe.ne.jp/~atarasi/［2006/12/13 参照］)より。

(53) 1日6時間を目安に各人の判断で行われ、日曜は休日、年間で20日の休暇が設けられている。60歳が定年で、以後は免除される。アサヒグラフ1979年『にっぽんコミューン』p163朝日新聞社より。

(54) アサヒグラフ1979年『にっぽんコミューン』p163,166-167朝日新聞社より。

(55) アサヒグラフ1979年『にっぽんコミューン』p163朝日新聞社より。

(56) 山岸巳代蔵全集ホームページ(http://www.yamagishi-miyozo.org/mokuji3.html［2006/12/13参照］)より。

(57) 山岸会ホームページ(http://www.koufukukai.com/index.html［2006/12/13 参照］)より。

(58) アサヒグラフ1979年『にっぽんコミューン』p139朝日新聞社より。

(59) 山岸会の参画者が、実際にその目標とする「無所有一体生活」を行っている場のことである。アサヒグラフ1979年『にっぽんコミューン』p136朝日新聞社より。

(60) アサヒグラフ1979年『にっぽんコミューン』p150朝日新聞社より。

(61) アサヒグラフ1979年『にっぽんコミューン』p152朝日新聞社より。

(62) 山岸会ホームページ(http://www.koufukukai.com/index.html［2006/12/13 参照］)より。

(63) アサヒグラフ1979年『にっぽんコミューン』p137朝日新聞社より。

(64) アサヒグラフ1979年『にっぽんコミューン』p172朝日新聞社より。

(65) 一燈園では園の中を「林内」、外の世界を「林外」と呼ぶ［村田1999:122］。

(66) アサヒグラフ1979年『にっぽんコミューン』p174朝日新聞社より。

(67) アサヒグラフ1979年『にっぽんコミューン』p172朝日新聞社より。

(68) アサヒグラフ1979年『にっぽんコミューン』p226朝日新聞社より。

(69) アサヒグラフ1979年『にっぽんコミューン』p189朝日新聞社より。

(70) アサヒグラフ1979年『にっぽんコミューン』p222朝日新聞社より。

(71) アサヒグラフ1979年『にっぽんコミューン』p222朝日新聞社より。

(72) 紫陽花邑ホームページ(http://www.ohyamato.jp/［2006/12/15参照］)より。

(73) アサヒグラフ1979年『にっぽんコミューン』p227,229朝日新聞社より。

(74) 特定非営利法人「交流の家」ホームページ
(http://www.asahi-net.or.jp/~fi2k-skgc/musubi.html［2006/12/15 参照］)より。
(75) 紫陽花邑ホームページ(http://www.ohyamato.jp/［2006/12/15 参照］)より。
(76) アサヒグラフ 1979 年『にっぽんコミューン』p232 朝日新聞社より。
(77) アサヒグラフ 1979 年『にっぽんコミューン』p233 朝日新聞社より。
(78) アサヒグラフ 1979 年『にっぽんコミューン』p222 朝日新聞社より。
(79) アサヒグラフ 1979 年『にっぽんコミューン』p222-232 朝日新聞社より。
(80) アサヒグラフ 1979 年『にっぽんコミューン』p208 朝日新聞社より。
(81) アサヒグラフ 1979 年『にっぽんコミューン』p211 朝日新聞社より。
(82) アサヒグラフ 1979 年『にっぽんコミューン』p215 朝日新聞社より。
(83) アサヒグラフ 1979 年『にっぽんコミューン』p215 朝日新聞社より。
(84) アサヒグラフ 1979 年『にっぽんコミューン』p216 朝日新聞社より。
(85) アサヒグラフ 1979 年『にっぽんコミューン』p204 朝日新聞社より。
(86) アサヒグラフ 1979 年『にっぽんコミューン』p210 朝日新聞社より。
(87) 東洋では「気」と呼ばれる生命エネルギーが集中する点で、ここでは人間がこのエネルギーを受け取って生き生きとエネルギッシュに変わることができると同時に、人は他の形の意識とのコンタクトを容易にできるようになる［ホーケン 1998:345］。
(88) 10 人から 20 人でひとつのグループになり、半日を「ラブ・イン・アクション（行動する愛）」と呼ばれる奉仕活動、残りの半日を有機農場や施設見学、近隣の散策、ダンス、ゲームなどで過ごす。尚、「ラブ・イン・アクション」とは台所仕事、庭仕事、建物のメンテナンスなどの日常業務で、自分の仕事を愛し、周囲の人々と調和して互いに最良のものを引き出し合う練習である［寺山 1998:49-50］。
(89) フィンドホーンホームページ
(http://www.findhorn.org/events/exspirit/foreign/history_japanese.php［2006/12/16 参照］)より。
(90) フィンドホーンホームページ
(http://www.findhorn.org/events/exspirit/foreign/history_japanese.php［2006/12/16 参照］)より。
(91) 1995 年に国連成立 50 周年において「平和活動に実績のある 50 のコミュニティー

のひとつ」として表彰を受けた他、1997年には国連から世界的役割を高く評価され、NGOとして正式に認可された。フィンドホーンホームページ(http://www.findhorn.org/events/exspirit/foreign/history_japanese.php［2006/12/17 参照］)より。

(92) 1992年、ユネスコと共同で平和をテーマにしたイベントを主催。サステイナブルコミュニティーをテーマにした 1994 年のフィンドホーン国際会議にもユネスコの支援を受けている。フィンドホーンホームページ(http://www.findhorn.org/events/exspirit/foreign/history_japanese.php［2006/12/17 参照］)より。

(93) アサヒグラフ 1979年『にっぽんコミューン』p216 朝日新聞社より。

(94) アサヒグラフ 1979年『にっぽんコミューン』p216 朝日新聞社より。

(95) アサヒグラフ 1979年『にっぽんコミューン』p102 朝日新聞社より。

(96) アサヒグラフ 1979年『にっぽんコミューン』p259 朝日新聞社より。

(97) アサヒグラフ 1979年『にっぽんコミューン』p216 朝日新聞社より。

(98) 地球の持つ能力以上に天然資源の利用を増やすことなく、世界全体の人々の生活を質的に向上させることを求める開発。国連広報センターホームページ(http://www.unic.or.jp/［2006/12/27 参照］)より。

(99) 国連広報センターホームページ(http://www.unic.or.jp/［2006/12/27 参照］)より。

(100) 外務省ホームページ(http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/kankyo/kiko/index.html［2006/12/27 参照］)より。

(101) ロハスとは、地球環境保護と健康な生活を最優先し、人類と地球が共栄共存できる持続可能なライフスタイルと、それを望む人たちの総称である。ロハスクラブホームページ(http://www.lohasclub.jp［2006/12/27 参照］)より。

参考文献

古田元夫

1991 『歴史としてのベトナム戦争』大月書店。

ギトリン，T

1993 『６０年代アメリカ―希望と怒りの日々―』疋田三良・向井俊二訳、彩流社。(Todd Gitlin, 1987, *The Sixties: Years Of Hope, Days Of Rage*. New York :Bantam Doubleday Dell.)

濱島朗

1973 『現代青年論』有斐閣。

橋本健二

1991 「文化としての資本主義・資本主義の文化」宮島喬・藤田英典編『文化と社会―差異化・構造化・再生産』pp.97-118、有信堂。

ホーケン，P

1998 『フィンドホーンの魔法』山川紘矢・山川亜希子訳、サンマーク出版。(Paul Hawken, 1975, *The Magic of Findhorn*. New York: Harper and Row Publisher.)

今津孝次郎

1998 「グローバル文化としての現代文化」井上俊編『現代文化を学ぶ人のために』pp.84-103、世界思想社。

伊奈正人

1999 『サブカルチャーの社会学』世界思想社。

岩永雅也

1993 「若者と現代」阿部斎編『変動する日本社会』pp.59-70、放送大学教育振興会。

甲斐武佳／北川聖美

1987 「ニューエイジ･サイエンス」C+F コミュニケーションズ編『ニューエイジ･ブック』pp.134-137、日本実業出版社。

ケニストン，K

1977 『青年の異議申し立て』高田昭彦・高田素子・草津攻訳、東京創元社。(Kenneth

Keniston, 1971, *Youth & Dissent: The Rise of a New Opposition*. New York: Harcourt Brace Jovanovich.)

キンケイド，K

1973 『ツイン・オークス・コミュニティー建設記』金原義明訳、明鏡舎。(Kathleen Kinkade, 1973, *A Walden Two Experiment: The First Five Years of Twin Oaks Community*. New York: William Morrow & Company, Inc.,)

今防人

1987 『コミューンを生きる若者たち』新曜社。

リー，M．A／シュレイン，B

1992 『アシッド・ドリームズ―CIA，LSD，ヒッピー革命』越智道雄訳、第三書館。(Martin A. Lee and Bruce Shlain, 1985, *ACID DREAMS: The CIA, LSD, and the Sixties*. New York: Grove Press.)

マッキーヴァー，R．M

1975 『コミュニティ：社会学研究：社会生活の性質と基本法則に関する一試論』中久朗・松本通晴監訳、ミネルヴァ書房。(MacIver Robert Morrison, 1917, *Community: A Sociological Study: Being an Attempt to Set Out the Nature and Fundamental Laws of Social Life*. London: Macmillan & Co.,Limited.)

真木悠介

2003 『気流のなる音』筑摩書房。

間々田孝夫

2005 『消費社会のゆくえ―記号消費と脱物質主義』有斐閣。

松原治郎

1972 『日本青年の意識構造』弘文堂。

メルニク，G．R

1990 『コミュニティの探求』栗本昭・長谷部美智子・佐藤孝一訳、御茶ノ水書房。(George R. Melnyk, 1985, *The Search For Community: From Utopia to a Co-operative Society*. Montreal-Buffulo: Black Rose Books.)

マーチャント，C

1994 『ラディカルエコロジー―住みよい世界を求めて』川本隆史・須藤自由児・水谷広訳、産業図書。(Carolyn Merchant, 1992, *Radical Ecology: The Search for A*

Livable World. New York: Routledge, Chapman & Hall.)

見田宗介

1996 『現代社会の理論』岩波書店。

宮原浩二郎

1990 「アメリカ知識層の変貌―＜ヒッピー＞から＜ヤッピー＞へ―」関西学院大学アメリカ研究会編『アメリカの現状と展望』pp.99-116、啓文社。

水津彦雄

1971 『日本のユートピア：日本的共同体の実証的研究』太平出版社。

村田充八

1999 『コミューンと宗教』行路社。

野本三吉

1996 『不可視のコミューン―共同体原理を求めて』新宿書房。

野村達郎

1989 「『豊かな社会』の中での自己満足の時代――九五〇年代を中心に―」、「現状変革運動が激発した時代――九六〇年代を中心に―」、「保守化を強めた時代――九七〇年代を中心に―」福田茂夫・岩野一郎・野村達郎編『アメリカ合衆国：戦後の社会・経済・政治・外交』pp.26-61、ミネルヴァ書房。

大類久恵

2002 「ニューエイジ運動」赤尾千波・明石紀雄・大類久恵・小塩和人・落合明子・川島浩平・高野泰編『２１世紀アメリカを知るための６７章』pp.152-155、明石書店。

ラム・ダス

1989 『ビー・ヒア・ナウ』プラブッダ，Ｓ．Ｐ・上野圭一・吉福伸逸訳、平河出版社。(Ram Dass, 1971, *Be Here Now.* San Cristobal: Lama Foundation.)

ローザック，Ｔ

1972 『対抗文化の思想』稲見芳勝・風間禎三郎訳、ダイヤモンド社。(Theodore Roszak,1969, *The Making of a Counter Culture: Reflections on the Technocratic Society and Its Youthful Opposition.* New York: Doubleday.)

坂田稔

1979 『ユースカルチュア史―若者文化と若者意識―』勁草書房。

セイル，K

1976 『アメリカ権力の逆転』大江舜訳、徳間書店。(Kirkpatrick Sale, 1975, *Power Shift*. New York: Random House.)

シルク，L／シルク，M

1981 『エスタブリッシュメント　アメリカを動かすエリート群像』山岡清二訳、ＴＢＳブリタニカ。(Leonard Silk and Mark Silk, 1980, *The American Establishment*. New York: Basic Books.)

寺山心一翁

1998 『フィンドホーンへのいざない』サンマーク出版。

海野弘

1998 『世紀末シンドローム』新曜社。

渡部重行

1995 『共生の文化人類学』学陽書房。

渡辺潤

1982 『ライフスタイルの社会学』世界思想社。

ウィリアム，H／ロジャー，B

1991 『超大国ニッポン―イギリス人の見た戦後の日本―』菅原啓州監訳、日本放送出版協会。(William Horsley and Roger Buckley, 1990, *Nippon New Superpower-Japan Since 1945-*. London: BBC Books.)

山田塊也

1980 「体験的六〇年代論－ビートからヒッピーへ」『インパクト』７。

［今 1987:26］から引用。

今防人

1987 『コミューンを生きる若者たち』新曜社。

弥栄之郷共同体

1989 『俺たちの屋号は「キョードータイ」：村に楽しい農業と暮しを―島根・弥栄之郷共同体の 17 年』新泉社。

弓山達也

2004 「価値相対主義への応答―オウム真理教とニューエイジ運動―」伊藤雅之・樫尾直樹・弓山達也編『スピリチュアリティの社会学―現代世界の宗教性の

追求一』pp.249-267、世界思想社。

英文サマリー

The value of "symbiosis"
-The way of life which countercultural community aims for-

Today, the globalization has rapidly expanded and the movement of people, objects, money and information has been greatly transformed. In this society, the problem of the misunderstanding, conflict between different cultures and disappearance of cultures has clearly existed. Additionally, even though the commitments to the world peace have been done for sixty years since the World War II, there are still several wars and terrorism occurring due to the difference of nationality and religion.

Therefore, the encouragement of understanding intercultural communication and coexistence with the variety are the important issue. In order to overcome this issue, what can we expect from the society?

"Counterculture" in this paper is the opponent to "main culture" which composes the main society. Representing this idea is the origin recurrence movement. For example, the antiracism during Vietnam War, the mental argument or hippie culture which criticize modern material culture, and the organization which recommends coexistence with nature. It is interesting that the people not related compose the "countercultural community" which is the embodied aggregate of countercultural thought with having the radical character. Moreover, it is interesting that the member of that community form the mutual respect relationship.

The purpose of this paper is to show the significance and importance of "countercultural community" as an ideal way of life. This paper discusses the values and social function of the "countercultural" thought, which affect the daily practices and the philosophy that subsists in the "countercultural" community. These practices and philosophy are the key factors that promote the intercultural

communication and coexistence with the variety.

This paper is based on the literature explaining about the counterculture and life of the community where counterculture is the background of existence and research on the thought and value.

In chapter two, the formation process and transition of "counterculture" will be shown and it will define that there is a border between "countercultural community" and main cultural society. In chapter three, the specific examples will be mentioned to disclose the content of value resulting in the direction of "symbiosis", which is shared in countercultural community, based on chapter two. Finally in chapter five, the importance of the countercultural community affects to each person's way of life today as producing the value, which points to "symbiosis", which should be related in main culture and also the ideal "symbiosis" removes the consciousness of egoism being the base of today's social problem.

謝辞

兎にも角にも、ようやく書き上げた、というのが現時点での心中である。本稿には、筆者が大学生活を通して培ってきた、己が目指すべき、そして周囲の人々や、ひいては世界中の人々が意識下に置いてほしい「生き方」に対する想いを織り込んだ。

本稿を執筆するにあたり、コミューンでの生活体験談によってカウンターカルチャー的共同体の存在を知るきっかけを与えてくれたバックパッカー、宇都宮雄高氏には厚く御礼申し上げたい。彼との出会いがなければ、今ここに本稿が存在することもなかったであろう。また、生活様式や人間関係における「共生」を重要視する筆者の価値観形成に多大なる影響を与えて下さった、両親、兄、友人、さらには旅行中に出会ったバックパッカー仲間や世界中の人々に対しても深く感謝している。

加えて、本稿執筆の前段階にあった独立論文のための研究開始当初から意見および助言を下さり、今に至るまで継続的に筆者の研究を支えて下さったゼミ生の皆様や、年長者として親身になって相談に乗って下さっただけでなく、文章校正や体裁整理に際しても身近な立場で御助力を賜った早川公先輩、英文サマリー作成に際する和文英訳に関して助言、助力を下さった奥隆光、三屋麻里の両人らの協力に深く感謝申し上げる。

そして何より、2 年間の長きに渡り、筆者のゼミ生としての活動と研究を見守って下さった上、本稿執筆に際しては、拙稿を丹念に読み込み、熱心に指導して下さった関根久雄先生に対する感謝の気持ちは表しようのないものである。ゼミ生同士が「平和的共存」関係を構築する「共生」的なゼミ空間を創り出すと同時に、「寛容」な態度でゼミ生と向き合う一方で、飄々と手厳しいことを仰る関根久雄先生は恐れ多くも「尊師」と呼ばせて頂くに相応しく、そんな尊師の下で人類学を学ぶことができたことを喜ばしく思うとともに、今後も末永いお付き合いをお願い申し上げたい。

最後に、現代社会の動向を握るのは、依然として「エスタブリッシュメント」の概念に代表される政治力と経済力である。だがそれらを創出・運用するのは他でもない人間である。したがって筆者は、人間に根差した研究を行う人類学は政治や経済を動かしうる視点を持つものであると信じ、今後の社会における「共生」の実現に寄与するべく、人間に根差した意識や観点を大切にしながら生きていきたい所存である。